

三谷遺跡・一つ山古墳群



1989年3月

富山県埋蔵文化財センター

三谷遺跡・一つ山古墳群

1989年3月

富山県埋蔵文化財センター

序

本県のほぼ中央に位置する小杉町南部の射水丘陵は、さまざまな遺跡が集中している地域として知られております。

これらの遺跡は、我が国の歴史舞台に登場するような華やかなものばかりではありませんが、私たちの祖先が英知の限りをつくし、生きてきた足跡を如実に物語るものです。

この射水丘陵に県立四年制大学が建設されることになり、富山県教育委員会では、これに先立つ発掘調査を昭和62年度から継続して実施してまいりました。「三谷遺跡」と「一つ山古墳群」も、その一つであり、幸い多くは、設計変更により現状保存することができました。

このようなことから、調査面積はわずかではありましたが、弥生時代から古墳時代にかけての集落と墳墓を明らかにすることができました。

こうした調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護と古代史研究の一助となれば幸いです。

終わりに、調査に際して終始ご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表します。

平成元年3月

富山県埋蔵文化財センター

所長 奥村 宏

例　　言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町黒河地内に所在する二谷遺跡と一つ山古墳群の発掘調査概要である。
2. 調査は、県立四年制大学の建設に先立ち、富山県総務部（県立大学創設準備室）の依頼を受けて富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 試掘調査は、富山県埋蔵文化財センター主任岡 清と同・主任山本正敏が担当し、本調査は、岡と同・主任酒井 重洋が担当した。
4. 調査事務局は、富山県埋蔵文化財センターに置き、主任肥田啓章・主任岸本雅敏及び主任久々忠義が調査事務を担当し、所長奥村 宏が総括した。
5. 資料の整理は、調査担当者がこれに当たった。
6. 調査期間中、山内賢一氏・宇野隆夫氏の来訪があり、有益な教示を頂いた。記して謝意を表す。
7. 資料整理期間中、大澤正巳氏の指導と助言を得た。また、好意により出土した鉄器の金属学的分析調査をしていただき、あわせて玉稿を賜った。記して謝意を表す。
8. 一つ山古墳群2号墳は、富山考古学会々員の岡 清、久々忠義、鳥出修一そして岡本淳一郎が1986年に実測したものである。本遺跡との関連性に鑑み、ここに収録させて頂いた。
9. 本書の編集と執筆は、所員の協力を得て調査担当者が行い、その文責は文末に記した。
10. 本書の挿図・写真図版の表示は以下のとおりである。
 - (1) 方位は、すべて真北。
 - (2) 水平基準は、海拔高。
 - (3) 遺構の表記は、次の略語を用いた。溝：S.D.、土壙：S.K.、井戸：S.E.
 - (4) 掘開の土器の縮尺は、1/3に統一した。
 - (5) 写真図版の遺物の縮尺は、原則として1/3に統一した。
 - (6) 写真図版の遺物番号は、挿図内番号と対応する。
11. 出土品及び記録資料は、富山県埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

I 序 章	1
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 遺跡の立地と範囲	2
3. 調査の経緯	2
II 三谷遺跡	4
1. 層 位	4
2. 遺 構	4
3. 遺 物	9
III 一ツ山古墳群	21
1. 立地と周辺の遺跡	21
2. 調査の経過	21
3. 1号墓	21
4. 2号墓	22
5. 遺 物	26
6. S地区	27
IV まとめ	28
1. 三谷遺跡の土器とその編年的位置	28
2. 一ツ山古墳群について	29
引用・参考文献	29
付載 三谷遺跡出土鋤先の調査	30

挿図目次

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡 | 第11図 土器実測（包含層） |
| 第2図 遺跡と調査区 | 第12図 石器実測 |
| 第3図 検出遺構と区割 | 第13図 遺物実測 |
| 第4図 井戸跡実測 | 第14図 木製品実測 |
| 第5図 遺構実測 | 第15図 1号墓9トレンチ実測 |
| 第6図 二谷遺跡出土土器分類 | 第16図 1号墓実測 |
| 第7図 土器実測（試掘） | 第17図 2号墓実測 |
| 第8図 土器実測（遺構） | 第18図 遺物実測 |
| 第9図 土器実測（包含層） | 第19図 S地区の遺構と区割 |
| 第10図 土器実測（包含層） | |

図版目次

- | | |
|---------------|--------------------|
| 図版1 三谷遺跡全景 | 図版10 三谷遺跡出土上土器 |
| 図版2 同、遺構検出状況 | 図版11 同、出土土器 |
| 図版3 同、遺構検出状況 | 図版12 同、出土土器 |
| 図版4 同、井戸跡検出状況 | 図版13 同、出土土器 |
| 図版5 一ツ山古墳群全景 | 図版14 同、出土土器 |
| 図版6 同、1号墓トレンチ | 図版15 同、出土上土器 |
| 図版7 同、S地区 | 図版16 同、須恵器・中近世陶磁器等 |
| 図版8 二谷遺跡出土土器 | 図版17 三谷・一ツ山古墳群出土遺跡 |
| 図版9 同、出土上土器 | 図版18 同、出土遺物 |

I 序 章

1 遺跡の位置と環境

三谷遺跡及び二ツ山古墳群は、富山県射水郡小杉町黒河西内に所在する。それぞれの遺跡の名称は、当地の旧字名に由来するものである。この地域は、富山県のはば中央に位置する射水丘陵の北端部にあたり、その前面には、広大な射水平野が展開する。三谷遺跡は、この丘陵と平野が接する所にあり、二ツ山古墳群は、この西側の丘陵台地上に立地する。

一帯の地層は、第三紀の青井谷泥岩層を基盤として、その上層に礫と砂泥からなる日ノ宮互層と太閤山火砕岩層が堆積する。太閤山火砕岩層の風化土は、良質の粘土となり、古くから窯業を支えた要因の一つとなっている。

当地域における歴史的環境を概観すると、旧石器時代から現在に至るまで、連続と人間の営みを見ることができる。とりわけ、須恵器窯跡や製鉄遺跡が多いのは、恵まれた自然環境が背景の一つとして考えられる。また、古墳などが丘陵縁辺に多く存在するのは、谷平野を利用した生活の基盤がある程度確立していたことを想起させる。これらを裏付けるように、周辺には二ツ山古墳群、岡山遺跡、そして南太閤山Ⅰ遺跡などの弥生時代から古墳時代の墓跡があり、同時期の集落として、中山南や上野遺跡がある。さらに、古代の須恵器窯跡としては、天池窯跡群や西山窯跡群があ



第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡(1/25,000) 1：二ツ山古墳群 2：三谷 3：二ツ山古墳群
4：中山北 5：中山南 6：岡山 7：黒河西山 8：黒河尺口 9：南太閤山Ⅰ 10：南太閤山Ⅱ
11：天池窯跡群 12：上野赤坂A 13：石太郎C

り、上野赤坂A遺跡や石太郎C遺跡に代表される大規模な製鉄遺跡群が数多く存在する。

今回調査した三谷遺跡は弥生後期から古墳時代初頭の集落跡であり、当地域での沖積地での調査としては、数少ない例である。また、一つ山古墳群は、隣接する二ツ山古墳群が消滅しているだけに重要な意味を持つ。(関清)

2 遺跡の立地と範囲

三谷遺跡は、前述のように丘陵と平野が接する沖積平野にあり、現在は、は場整備が完了した美田となっている。一つ山古墳群の立地する丘陵台地裾部に沿って広がり、その推定範囲を第2図に示した。試掘により確認した旧地形は、遺跡東側に深い谷があり、三谷遺跡はテラス状台地に立地することになる。丘陵部に近接する所では、は場整備の際に一部削平されているものの、全体として遺存状況は良好と言える。

一つ山古墳群は、北方に張り出した舌状の丘陵台地上にあり、これまでに2基の墳墓が確認されている。今回調査した1号墓は、丘陵台地の北端に位置し、その頂部は標高14m弱である。さらにその北側斜面には、製鉄炉や炭焼窯があり、今回の調査でS地区と称した所である。(関清)

3 調査の経緯

(1) 調査の契機

昭和62年3月、県高等教育機関整備委員会から「提言」という形で県立四年制大学構想が答申された。これは、小杉町に所在する県立技術短大を吸収増築するもので、3年後の開学を目指すものである。この答申を受け宮山県では、62年度から用地取得を開始し、具体的な建設へと動きだした。ところが、建設計画内に4箇所の埋蔵文化財を含む地が存在することが明らかになり、その取り扱いについて教育委員会と協議を重ね保存措置を講じたものである。

(2) 既応の調査

第一次調査 昭和62年7月7日から8日までの2日間に、二ツ山古墳群の試掘調査を実施した。その結果、かつて存在したとされる古墳は既に消滅していたものの縄文時代、古墳時代そして奈良時代の遺物と遺構を確認した(県埋文1988)。とりわけ奈良時代の遺構の遺存状況が良好であるため、設計変更により現状保存の措置を講じた。

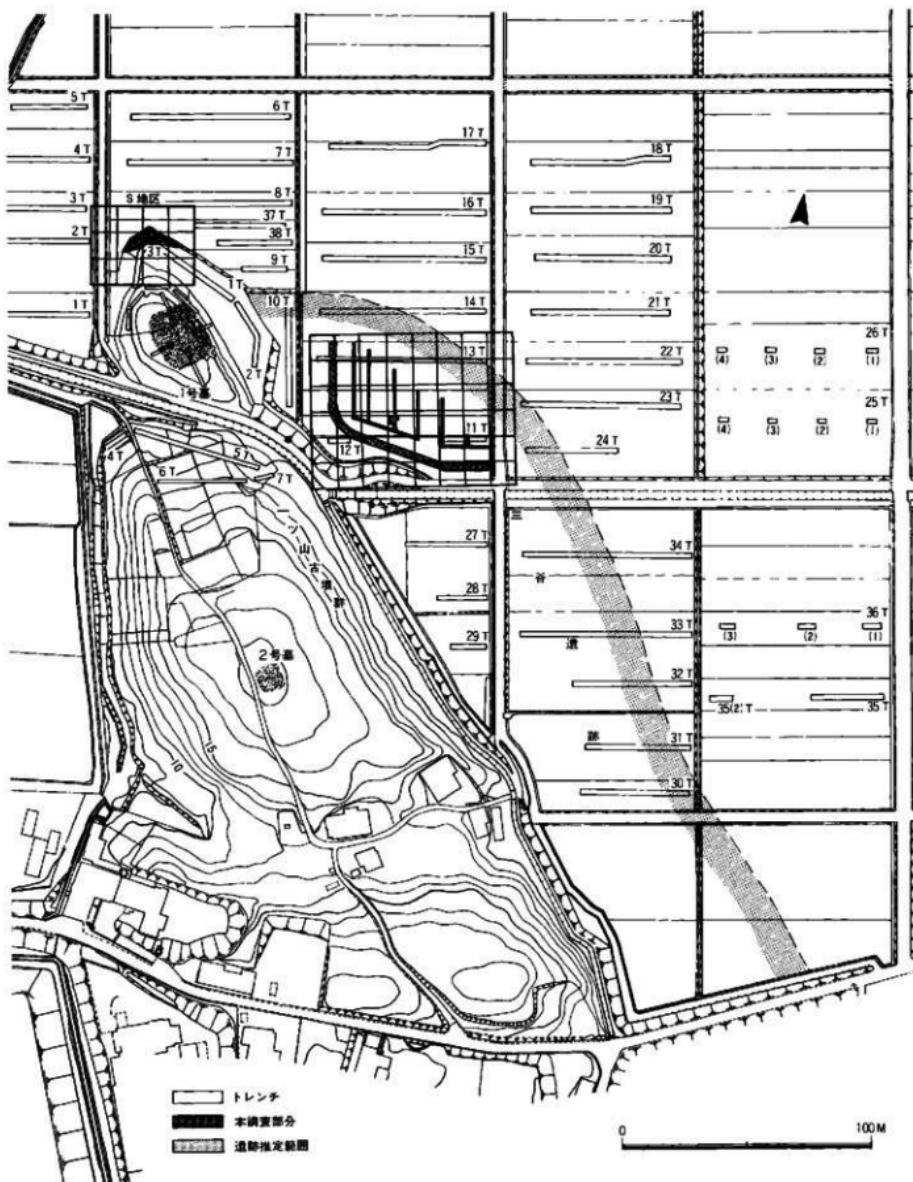
第二次調査 二ツ山古墳群と一つ山古墳群の間に位置する大門北遺跡(仮称)の試掘調査である。昭和62年11月16日から18日の3日間で実施した。当地域はもともと開拓された谷であり、出土したわずかな遺物は周辺からの流入と考えられた。したがって、大門北遺跡は、一つ山古墳群の西側斜面もしくは、さらに上流域にあるものと推測される(県埋文1988)。

第三次調査 本書で報告する三谷遺跡と一つ山古墳群の大学グランド造成に伴う試掘調査である。期間は、昭和63年5月11日から6月15日までの22日間である。一つ山古墳群は、結果として現状保存できることとなったので、詳細は本書に譲ることとする。三谷遺跡は、弥生時代後期を主体とする集落跡で、その面積は約15,000m²に及ぶことが判明した。県総務部との協議により、その大部分は工法変更により保存することができた。

第四次調査 本書で報告する三谷遺跡と一つ山古墳群S地区の調査である。第二次調査結果と協議結果により、道路部分と暗渠配水管埋設部分の記録保存調査である。期間は昭和63年7月26日から8月31日まで、三谷遺跡が512m²、一つ山古墳群S地区が78m²、合計590m²の調査である。

(3) 調査の方法

調査は耕作土の除去を重機で行った他は、全て人力で行った。区割りは、第3図に示したように調査対象域の南西隅に原点を置き、メッシュで全域をカバーした。道路に係る所は幅3m、暗渠配水管埋設部は1mの幅で最終遺構面まで漸次掘り下げた。線的な調査ではあったが、溝などについては、その在り方を知る事ができた。(関清)



第2図 遺跡と調査区 (1/2,000)

II 三 谷 遺 跡

遺跡を東西に分断する六箇用水がある。昭和43年に二方コンクリートの堅固なものに改修されたもので、その源は庄川より発する。三谷遺跡は、この用水改修時に発見されたものであり、当時採集された遺物は、発見者の久野かのる氏により現在まで保管されている。今回調査したのは、六箇用水の北側、すなわち遺跡の北端域になる。

1 層 位

調査区西側、すなわち丘陵裾部は、ほ場整備の際に削平を受けたため、耕作上直下が黄色粘質上の地山となり、すでにII~IV層の土は消滅している。一方、旧谷部へ近づくにつれ層序が明瞭になる。

X10 Y30付近に見る基本的な層序は、40cm程の耕土下に水田基盤となる茶褐色土が薄く入る。その下層にII層の黒褐色粘質土とIII層の暗褐色粘質土があり、遺物包含層となる。なおII層は、ほ場整備の際に擾拌された層である。そしてIV層が灰黄色粘質土となる。III層は中世以降の遺構形成面であり、IV層が弥生時代後期の遺構形成面、いわゆる地山となる。

当地域は、ほ場整備が行われているため、場所によってIII層が遺存しないこともある。また、III層とIV層が分層不可能な場所もあり、結果として同一面で各時期の遺構が検出された。

遺物が含まれるのは、III層からIV層上面であり、遺物の多くは遺構形成面よりも浮いた状態で出土している。またII層の擾乱層は、所によってはIII層に深く入り込み、結果として須恵器などが弥生末から古墳時代初頭の土器と同レベルで検出される。

(関 清)

2 遺 構

今回の調査で確認した遺構は、溝4条、土壙2基、そして井戸跡2基である。しかし、縦的な調査のため、遺構の性格を窺い知れるものは少なく、全体的な把握という点で適正さを欠くことは否めない。このような中で井戸跡は、弥生末から古墳時代初頭の遺物が供伴しており、当遺跡が該期の聚落の一角であることを裏付けるものである。

(1) 土 壙 (第5図)

S K02 X 9 Y33区にあり、径76cmの内形になるものと考えられる。掘り方は浅く、擂鉢状となり最も深い所で70cmを測る。遺構内からは遺物の出土はなく、性格は不明である。

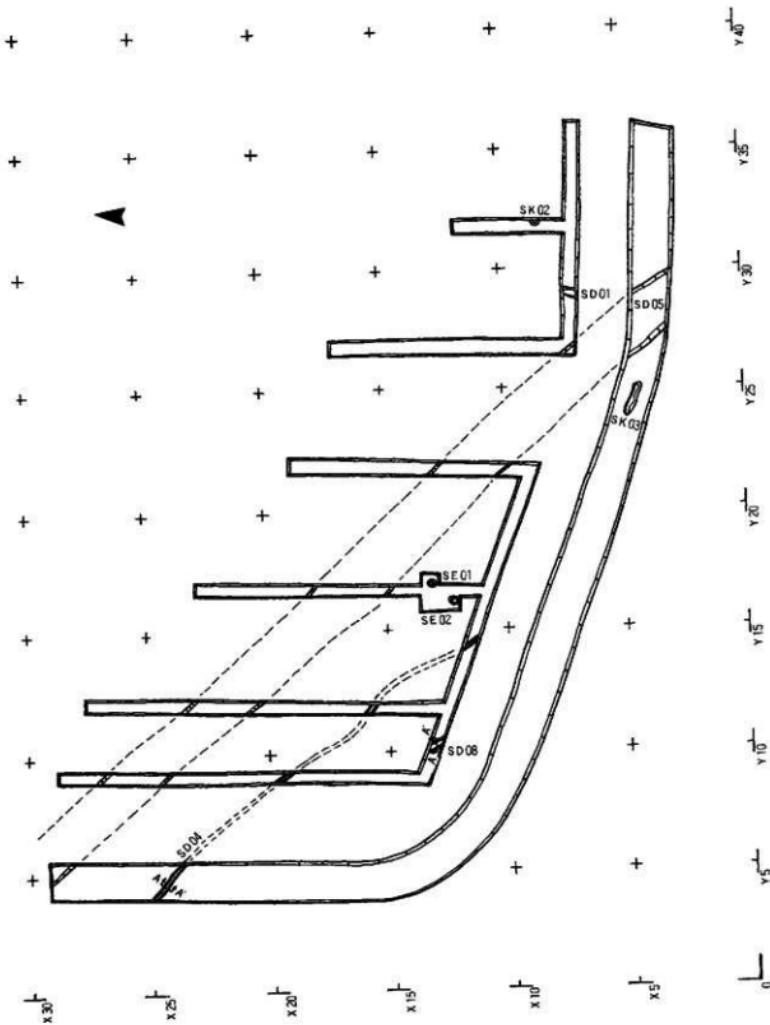
S K03 X 5・6 Y24・25区で検出したものである。最大幅70cm、長さ3.1mの細長い不整精円形を呈し、むしろ溝と呼んだ方が適切かもしれない。SK02同様に掘り方は浅く、暗褐色粘質土が埋土となる。このSK03の中及び上面からは、多量の土器が出土しており、当遺構の年代を示唆する。

(2) 溝 (第3・5図)

S D01 X 8 Y29区で検出した南北に走る溝である。上端の幅80cm、下端50cmで深さ20cmを測る。北側にわずかな段が見られる。遺構内からは遺物の出土はない。

S D04 第3図に見るように、南北の調査区すなわちY12列、Y9列そしてY5・6列において検出された。上端30cm、下端15cm前後、深さ20cmの断面逆凸形の細い溝である。溝の方向から推察して、ゆるく蛇行しながら続く一条の溝と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、出土した遺物は全て弥生後期から古墳時代にかけてのものである。配置からS D05との関連も窺えるが、確証はない。

S D05 幅4mに及ぶ大溝である。S D04同様に南北の調査区で検出し、丘陵裾部に沿う一条の溝と考えられる。



第3図 検出造橋と区割(1/400)

そして、それはさらに調査区外へと延びることは確かである。当溝は第5回の断面図に見るように、Ⅲ表上を含む耕作土直下から掘り込まれⅢ層の遺物包含層を切る。ほ場整備の際の影響が見られ、①層は地山土である黄褐色粘質土に黒褐色土ブロックが入る。いわゆる汚れた土である。③層は暗黒褐色粘質土で、土器などの遺物はない。そして、植物遺体がかなりの量で見られる。このことは、この溝がおだやかな環境のもとで埋没したことを意味すると考えられ、後世の擾乱を受けていないことを物語る。

溝の在り方を見ると、立ち上がりはゆるやかではあるが、規格性があり、なおかつ直線的であることは、多分に入工的な掘削によるこことを意味すると考えられる。また、溝の埋土中からは株洲焼片や青磁などが出土しており、室町時代以降に埋没したものと考えられる。なお遺物の多くは①層中であり、弥生末から古墳時代初期の土器片も多量に混入している。また、この溝については、ほ場整備前に用水などとして機能していた事実ではなく、昭和9年に発行された『富山県射水郡黒河村地番反別入地図』に見るいずれの用水にも符合しない。

S D 08 X13・14 Y11区で検出した溝である。幅70cmで、断面はやや不整ながらもU字形となる。現存での深さが30cm程度で、埋土は茶褐色粘質土の上に黒褐色粘質土が入る。出土遺物はなく年代の決め手に欠く。溝の方向は、SD 04及びSD 05と同じであるが、長いものとはならないようである。
(関 清)

(3) 井戸 (第4回、図版4)

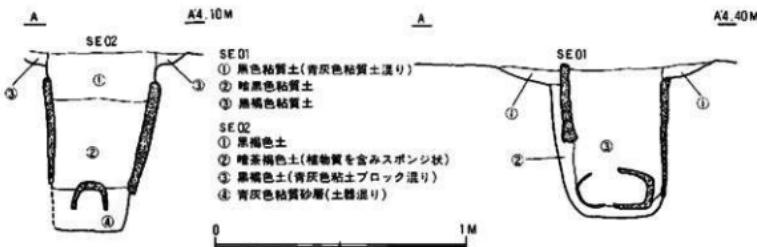
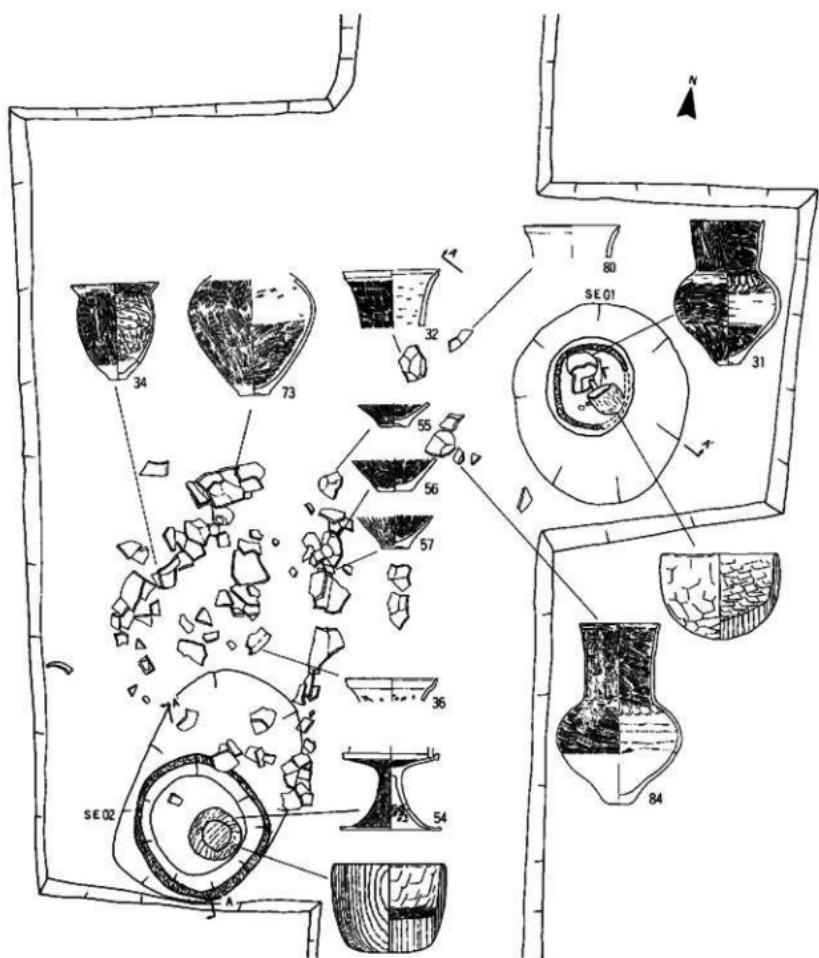
井戸跡は、調査対象地区のほぼ中央部X13、14・Y17区付近で2箇所検出された。この付近では、2~3層にかけて大量の遺物の出土があり、良好な遺物包含層が存在すると想定された。遺物包含層を除去すると4層内に青灰色粘土のブロックを含む黑色土が検出され、造構上面と考えられた。そのため、この部分の調査トレンチを拡張し、造構の調査を行った。

S E -01 造構検出面では、黒色土が約50cmの円形に中央部で確認され、青灰色粘土混じりの黒色土が80×70cmの長円形、深さ5~10cmに広がる。掘り上げた土を周辺にまいたものであろうか。井戸は、直径約40cm、深さ約60cm、厚さ3~5cmの円形で一本作りの井戸枠が残る。井戸枠は、表面がかなり荒れているため工具痕などは確認できず、空洞となった丸太を一部加工し利用した可能性がある。井戸の掘り方は円柱状で、その中に井戸枠を埋め込む。覆土は、植物繊維を多く含むスponジ状の黒色土で後に洗浄すると中から炭化米、植物の種子が出土した。井戸の底面からは、長頸壺と柄物の鉢や杭状の木製品などと共に出土した。

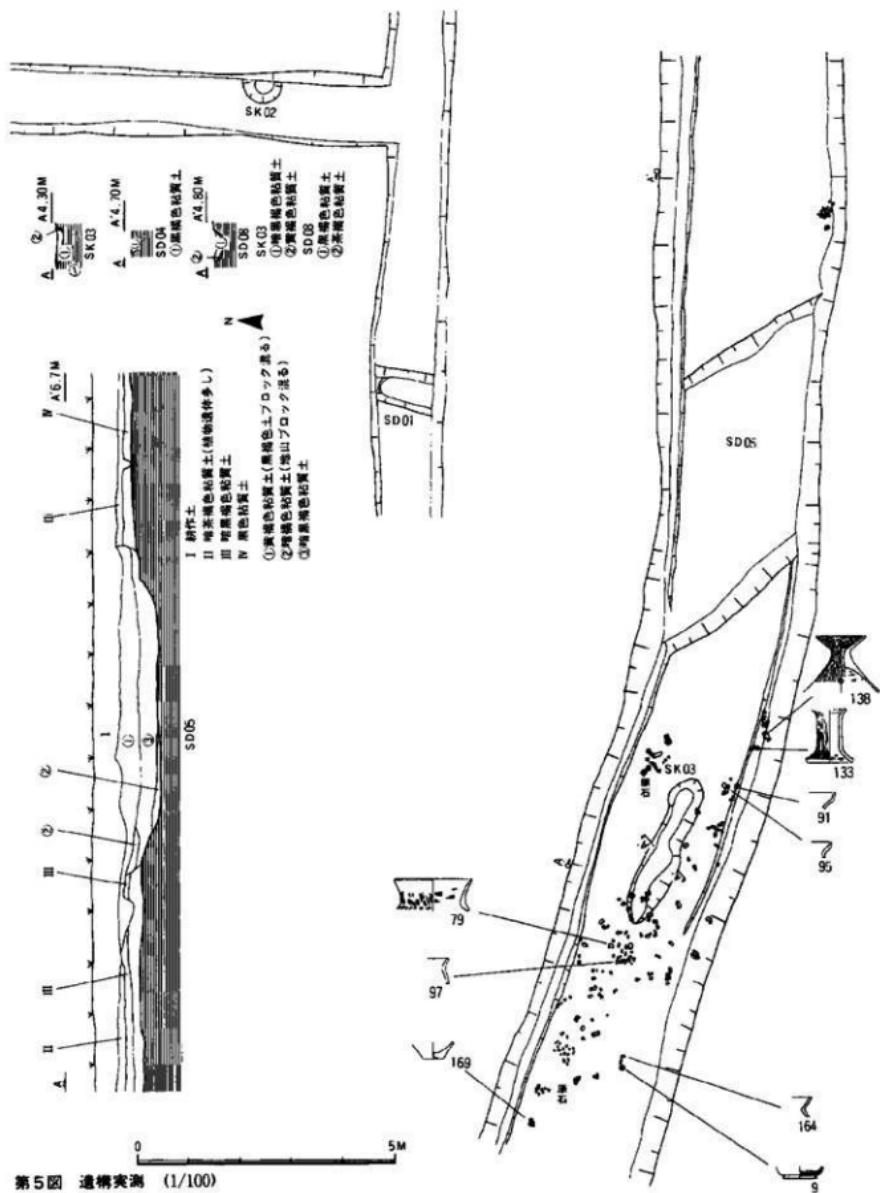
S E -02 S E -01の南西約2mの所に検出された。検出状況は、S E -01とはほぼ同様で60~95cmの長円形に青灰色粘土混じりの黒色土が広がる。井戸枠は、造構検出面から約10cm下に、直径55~60cm、高さ約40cm、厚さ5~10cmで全周し、残る。加工痕は、遺存状態が悪く確認出来ないが、この井戸枠もS E -01同様の作り方と考えられる。

土層は、井戸上部に3層に近い黒色土がみられるものの、井戸中央部(②層)は植物質を含むスponジ状となり、植物の種子を含んでいる。最下層は、青色砂層で細かく碎かれた土器(1~3cm程)が厚さ約20cmにびっしりと散かれる。このような例は、県内初例である。水の濁りを防止するためであろうか。また、④層上面に一本作りの柄物の鉢未製品が逆さの状態で出土した。

県内で弥生時代の井戸を検出した例としては、上市町江上A遺跡がある〔久々1984〕。江上A遺跡の例も同様に、木製の井戸枠を持つ。井戸枠は、半月状に削り作られた木を2個合わせる例である。また、本遺跡の例同様に中からは鉢状の柄物未製品(高杯の脚部か)が出土している。この3例は、いずれも木製の井戸枠を持ち、なかから鉢状の容器が出土するという共通性を持つが、性格などは不明である。
(酒井重洋)



第4図 井戸実測図 (1/20)



第5圖 遺構突測 (1/100)

3 遺物

三谷遺跡から出土した遺物は、旧石器時代、縄文時代、弥生後期、奈良時代そして中近世のものがある。層序による区分は、明確ではない。しかし、奈良時代以降の遺物の多くは、耕作土からの出土であり、すでに原位置をとどめないものである。出土量は弥生後期のものが圧倒的に多く、当遺跡の主体を占める。なお、ここで紹介する遺物の中には、試掘調査で得た資料と当遺跡の発見の契機となった久野かのろ氏所蔵の遺物も若干含まれる。

(1) 弥生後期の土器と分類

該期の土器は、調査区全域から出土するが、とりわけ井戸跡付近と S D03付近からまとまって出土した。これらの上器の多くは破片であり、完形品として復元できたのはわずか3点にすぎない。岡化できたのは173点であり、その抽出にあたっては、岡化可能な土器の全てを含めたつもりである。

分類 (第6図)

分類にあたっては、当遺跡出土資料に限ったため、主要な器種が欠落していることは否めない。分類は第6図に示したとおりであり、器種別、かつ形態差にもとづいたものである。

彫形土器 出土比率は最も多く、45.2%を占める。

A類 有段口縁をもち、その口縁部に擬回線を施すものである。当遺跡からはわずかに4点出土している。

B類 有段口縁をもち、口縁部をヨコナデするものである。法量により2つに細分した。

C類 ヨコナデによる口縁で、その形態は強く外反し、受け口状となる。いわゆる近江系の特色を有する。法量により3つに細分した。

D類 「く」の字口縁で、その内側はハケにより調整される。D₂は口縁部が肥厚するものである。

E類 口縁部形態は「く」の字を呈するが、口縁端部が指頭により整えられる。体部外面はナデにより仕上げる。

鉢形土器 4点出土している。

A類 口縁部を内外面とともにヘラミガキを施し、体部は外面をハケ、内面をヘラミガキする。内面は丹塗り。

B類 口縁部は強いヨコナデを行い、端部が薄く伸びる。体部は丸く仕上げ、内外ともにハケによる調整。

壺形土器 出土比率は30.9%で、形態は多種多様である。

A類 ほぼ垂直に立ち上がる有段口縁をもち、体部は下膨れの算盤玉状となる。東海系の影響を持つと考えられる。

B類 有段口縁部に12条の沈線が走る大型のものである。甕の可能性があるが、ひとまず壺に分類した。

C類 短い頸部から受け口状に内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。甕の可能性もあり、近江系の特色を持つ。

D類 有段口縁を持つ小型品である。口縁部外面には「V」字状工具による連続刺突文が2段に施される。内面はヘラミガキされ、内外面ともに丹塗りの痕がみられる。また口縁部には小さな穴が穿たれる。

E類 強く外反する口縁部で、その径は端部で26cmにおよぶ。端部は断面三角形となり。粘土紐による装飾が付く。

E₂類 頸部に凸帯をめぐらすものである。凸帯をヘラ状工具で削むものと刻みを持たないものを一括した。

E₃類 体部が球状を呈し、頸部に凸帯は見られない。外面をヘラミガキし内面はハケにより仕上げる。

F類 ゆるく外反する口縁部で、端部をおさえ面取りする。直口壺になるものと考える。

G類 外反する頸部をもち、口縁端部をシャープに上方へ引き出す。

H類 口縁部がゆるく外反する小形品である。

I類 長頸壺である。頸部から端部にかけてゆるく外反し、端部をヨコナデにより内側におさえる。

J類 ほぼ垂直に立ち上がる頸部を持つ。体部は球状となる。頸の長いものをJ₁とし、短いものをJ₂とした。

K類 全体的に粗雑な作りとなる。荒いハケで全体を調整し、体部はわずかに張り出すものである。

L類 小形の長頸壺である。口縁部はヨコナデにより幅広く作り出す。外面を丹塗りする。

M類 手づくねの小型品である。外面をナデて仕上げる。

高杯形土器 いずれも破片のため、便宜上杯部と脚柱そして脚台とに分類した。

杯部 いずれも途中で屈曲し、外反して伸びる。A類は屈曲部より先端が余り伸びず先端を丸くおさめる。Bは、外面屈曲部が垂下して断面三角形となる。屈曲部より先は大きく伸び端部内面は肥厚する段をもつ。C類は、B類と同じ形態であるが先端部は下方に引き出しがみにおさめるものである。D類は、小形の高杯である。

脚柱 A類は、棒状のもの。B類は、ややふくらみをもつもの。C類は、杯部接合部からゆるく聞くものである。D類は、C類と同じく下方へ聞くが、上部に5条の沈線が入る。E類は、杯部内面に環状の剥離痕があることから、特殊器台のような形になるものと考えられる。脚台には4箇所に透かし孔がある。

脚台 A類は、縁部に粘土帯を重ね、縁部に「ハ」の字状の工具で装飾を加えるものである。B類は、重ねた縁部の粘土帯を引き出し、その面に5条の沈線を施すもの。C類は、縁部を「く」の字状に折り曲げる。D類は、C類の縁部をさらに下方に折り曲げるものである。

器台形土器 高杯形上器同様に全器形を窺い知れるものはない。また、高杯を含んだ可能性もある。

A類 棒状の脚柱に短い脚台が付くもの。

B類 脚柱が棒状になるものである。脚柱下部に4個の透かし孔を穿つ。

C類 棒状の脚柱に、屈曲する脚台がつくものである。脚台との接合部に4個の透かし孔を穿つ。

D類 下方にゆるく聞く脚柱に、屈曲する脚台がつくものである。法量の小さいものをD₂とした。

E類 脚柱から脚台にかけて屈曲することなく、スムーズに聞くものである。

F類 脚台の外面屈曲部に凸帯を作り出し、その凸帯を挟んだ位置にそれぞれ4個の透かし孔を穿つ。

G類 開きの小さい脚台がつくものである。透かし孔はF類同様、凸帯を挟む上下に4個を穿つ。

瓶形土器 4個体分が出土し、25は完形品である。

A類 器高が高く、平底である。穿孔後内外面から面取りを行う。体部内面下半部はナデによる調整となる。

B類 底部は尖底状になり、穿孔後の調整も丁寧である。外面はハケを用い、口縁部付近に小さな楕円形刺突痕が見られる。また内面は、口縁部付近をヨコナデし、その下方はナデにより仕上げる。底部には指頭痕を残す。

a 試掘資料（第7図）

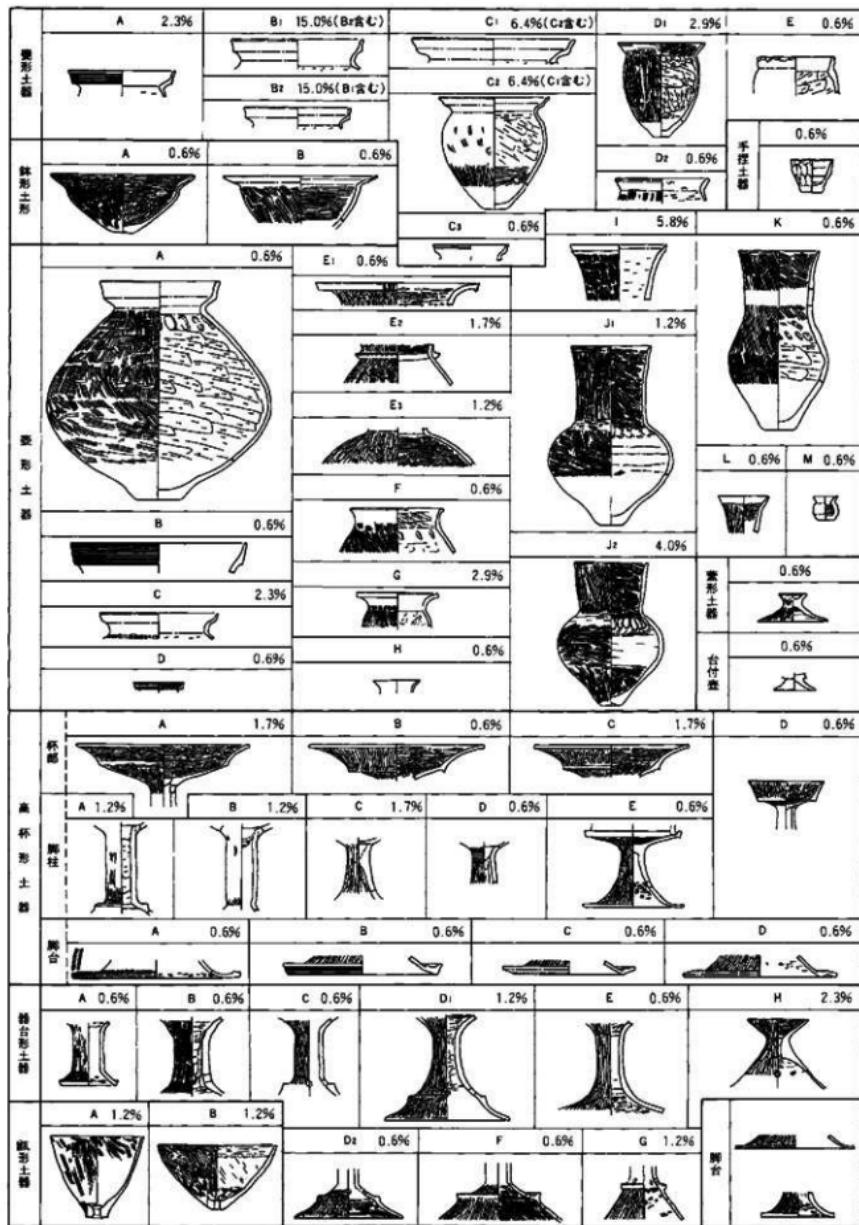
記録保存対象地区に含まれた11トレンチの資料を除く。甕形土器、壺形土器、鉢形土器、瓶形上器そして高杯形土器がある。以下、前の分類に基づき説明する。なお、当資料の多くは、六箇用水の南側で出土している。なお、遺構に伴うものもあるが、遺構は発掘していないため、その詳細は不明である。

甕形土器（1～12） B₁類（4・5）、B₂類（3・8）、C₁類（6・7）そしてC₂類（1）がある。B類は当地方に一般的に見られる器種であり、口縁部の幅は広くはない。C類は、外反する口縁をもち、その端部がわずかに内傾するものである。

壺形土器（13～15・20） E₁類（15）は、口縁部のみであるが、その端部を垂下させ、粘土紐による装飾を加える。いわゆる東海系の影響を窺わせる。E₂類（20）は、頸部に断面三角形の凸帯をめぐらすものである。L類は、台付長形壺の口縁部になるものと考えられる。

鉢形土器（21・23） A類（21）は、32トレンチの遺構内からの出土品である。そのプランから住居跡の一角である可能性が強い。外面には煤が付着し、内面は、丹塗りされる。また、内面には刺突によるキズが目立つ。

瓶形土器（22・24・25） 24は32トレンチの上塙からの出土品である。ここで注目されるのは、口縁内部の上部付近に細かい擦痕が認められることである。この擦痕は水平に連なり、何らかの器物が組み合わされて使用されたこと



第6図 三谷遺跡出土土器分類 (%は図示数の個体比率)

を窺わせる。

高杯形土器 (26~29) 26は杯部A類、27はB類であり、共に34トレンチからの出土である。28はD類である。33トレンチより出土している。29は脚柱C類である。一つ山古墳群の丘陵裾部に近い10トレンチから出土している。

b 造構出土資料 (第8図)

確実に造構内から出土したのは第4図に示したように井戸跡内の31と54のみである。その他のものはその周辺から出土したものである。ただし、出土状況がこの地点に集中することからこれらを一括し、造構出土資料とした。ちなみに31~61までが井戸跡周辺からの出土品である。そして62がS D04、63・64がS D05からの出土である。

壺形土器 (34・35・37~40・45~49・58~64) B類では口径を知り得るものとしては、B₁類(38)、B₂類(40・62)、C₁類(37・39)、D₁類(34)そしてD₂類(35)がある。B₂類(62)はS D04からの出土である。47は肩の部分にハケ状工具の木口伝版を斜状に残すものである。

壺形土器 (31~33・36・41~44・50~53) 端部を明顯に表現するI類(32・33・36・41・43・44・50~53)が多い。J₂類の31は、S E01からの出土で、完形品である。42はK類の頸部と考えられる。

高杯形土器 F類の54は、S E02からの出土である。丹塗りされており、特殊器台の可能性もある。

壺形土器 (63)は、A類の底部と考えられる。

c 包含層の遺物 (第9~11図)

主にSK03付近から出土している。第11図の148~160は、六箇田水掘削の際に採集されたものである。ここではこれも含めて記述する。なお、第5図に示した位置からヒスイ、碧玉と滑石の原石がまとまって出土している。

壺形土器 (第9図66・68・71・72・85~104・第11図143・147・161~164・172) 壺A類は、88・89・143そして147の4点のみで、壺口縁部に占める比率は、8.7%である。B類は、68・72・85~87・92~94と162である。口縁部径の不明なものが多いものの、壺に占める割合は57%と高い。C類は、71・91・163であり、C₃類とした71は、口縁端部に一条の沈線が引かれる。D類は、全て小破片であり、口径を知り得ない。95~98そして164がそうである。E類は149の1点のみである。説明は分類の項で行ったので省く。

壺形土器 (65~67・69・70・74~84・99~104・145~148・150~156) 壺Aは150の1点のみである。口縁部形態は壺Bと同じであり、当地方に一般的に見られるものである。しかし、下部膨れの胴部は、東海系の影響を受けたものとして興味深い。B類も1点のみであり、説明は分類の項に譲る。C類は67・69・104・144であり、短い頸部に有段口縁がつく。67は、口縁をヘラ状工具で削みをつけることで近江系の特徴を持つ。D類も1点である。E₂類は75と148で148は凸帯に刻みが施される。E₃類は、74・76の2点でいずれも頸部より上を欠く。胴部は球状となる。F類は155の1点。G類は小破片ではあるが99~102・145・146がそれになるとを考えられる。H類は83の1点。I類は66~78・80・81であり、その端部の形状には、さらにバラエティがある。J類は、79・84・152~154そして151であり、確実にJ₁類、すなわち頸部が長いものは84の1点のみである。K類(151)及びM類(172)は、それぞれ1点。

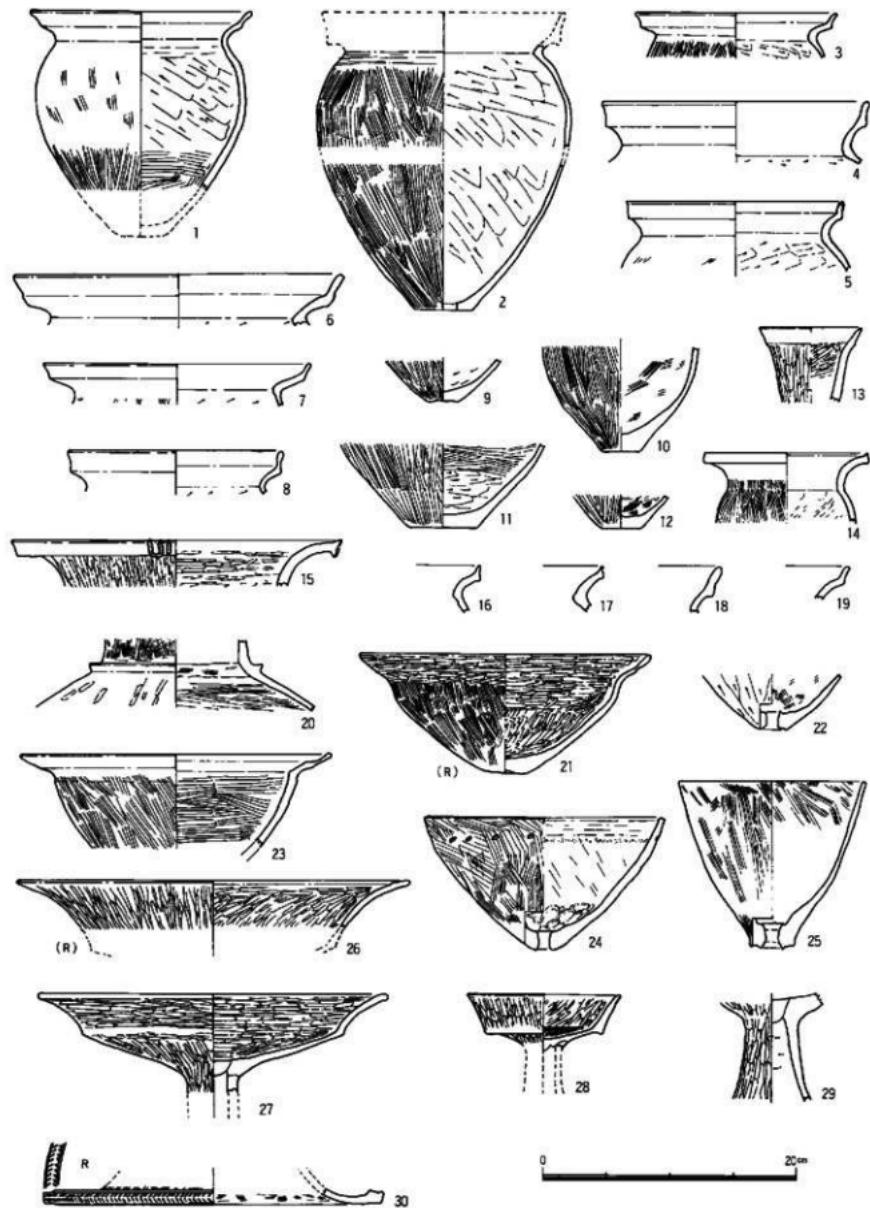
高杯形土器 杯部(112・118~120・157)、脚柱(128~132・159)、脚台(116・117)があり、いずれもその全形を窺い知れるものはない。説明は前の分類の項に譲る。

器台形土器 H類(136・138)の小型器台形土器以外は全て1点ずつの出土である。高杯形同様に全形を窺い知れるものではなく、説明は省く。

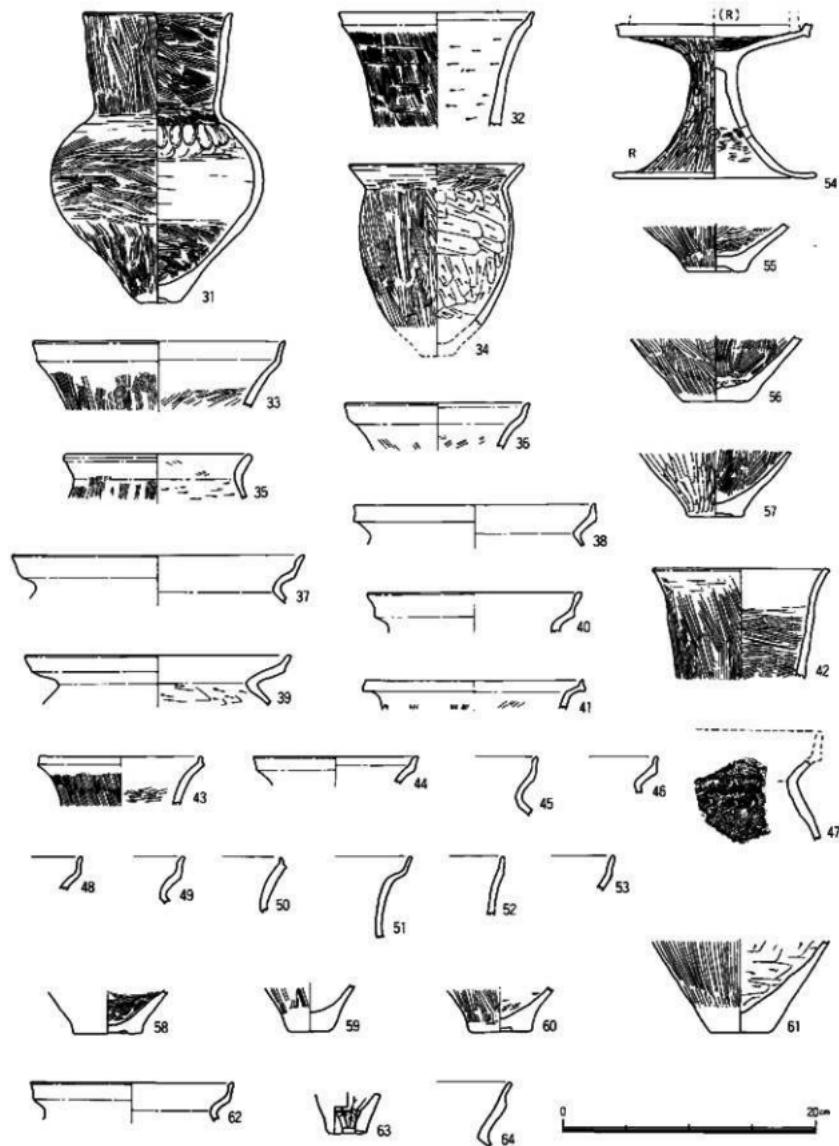
壺形土器(140)は、つまみ状部分を指頭により調整し、外面はヘラミガキを行う。内面はナテ調整で端部を欠く。

手捏土器(139)は体部外面を指頭により調整し、内面は簡単なナテを行う。粘土の接合痕が見られる。

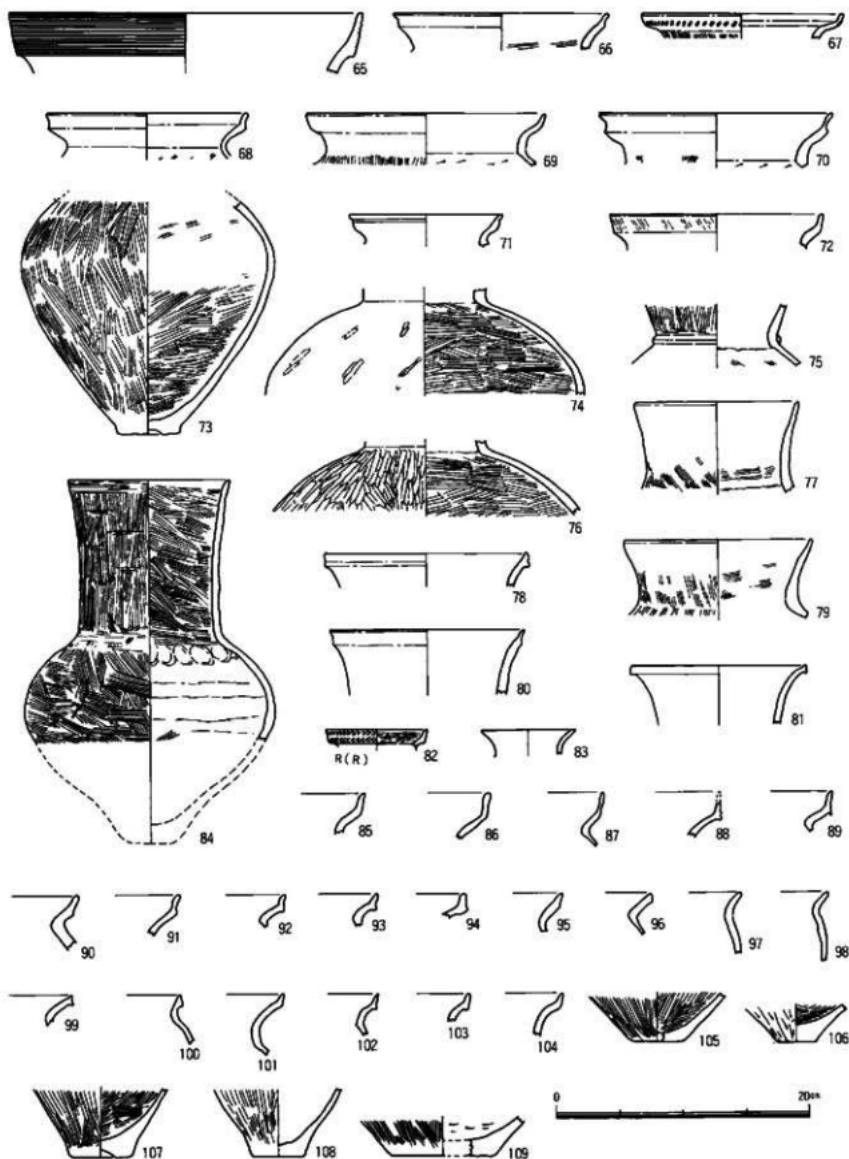
台付壺形土器(170)台付鉢の可能性もある。台部のみで全形を知り得ない。ヨコナテ調整される。 (関 清)



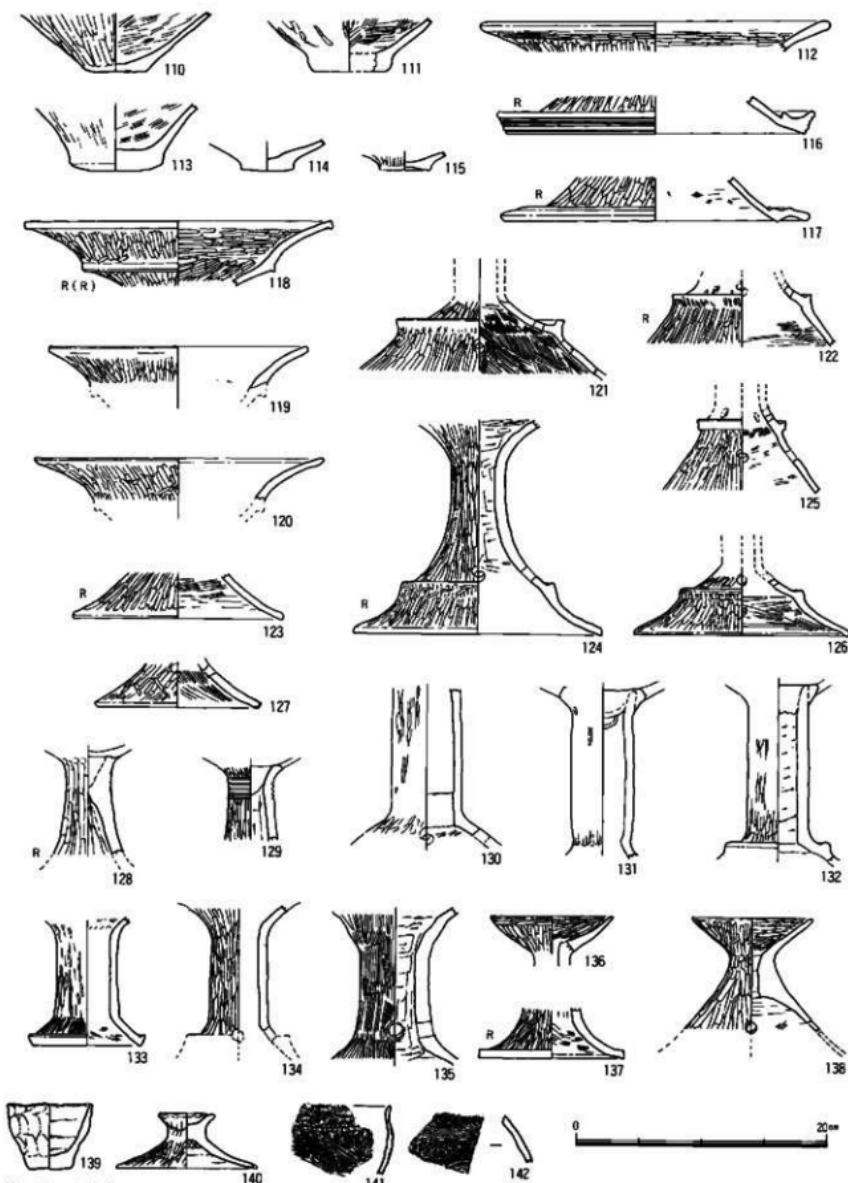
第7図 土器実測 (1/4・試掘) R: 外面丹塗り、(R): 内面丹塗り



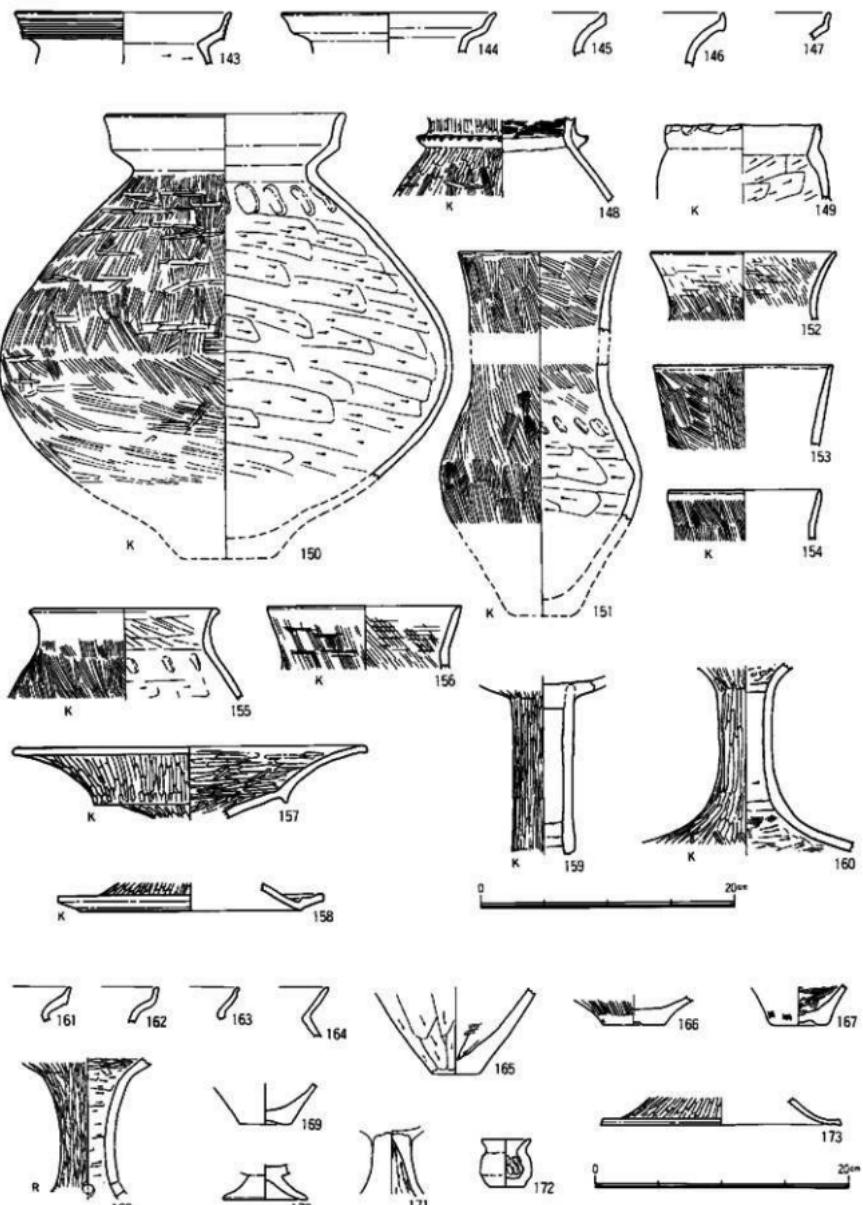
第8図 土器実測 (1/4・造構)



第9図 土器実測 (1/4)



第10図 土器実測 (1/4)



第11図 土器実測 (1/4) Kは久野氏蔵品

(2) 先土器時代の石器 (第12図)

確実に先土器時代に属する石器は、弥生時代包含層中から2点出土している。1は、珪化凝灰岩製の石刀である。打面調整及び頭部調整がみられる。背面側の剥離の進行は右から左へと移動する。両側縁には、細かな刃こぼれ状の使用痕、背面中央部にはかなりの範囲にわたり、光沢が顯著にみられる。重量は21g。

2は小型の局部磨製石斧である。石質は流紋岩系と考えられる。背面に穂面の残る剝片を素材とし、周縁加工を加え形状を整えている。裏面中央やや左側の大きな剝離面は、やや不明確であるが、ボジ面と考えられる。刃部は丸みをもった両刃で、いわゆる蛤刃状になる。刃部研磨時の擦痕は非常に細かく、全体的な表面風化のため、不明瞭な部分もある。表裏両面とも、中央部を中心に剝離底の陵抜付近では磨滅が著しいが、使用痕の可能性がある。重量67g。全体的なプロポーションは八尾町長山遺跡例〔山本1985〕に似る。

(山本正敏)

(3) 繩文時代の遺物

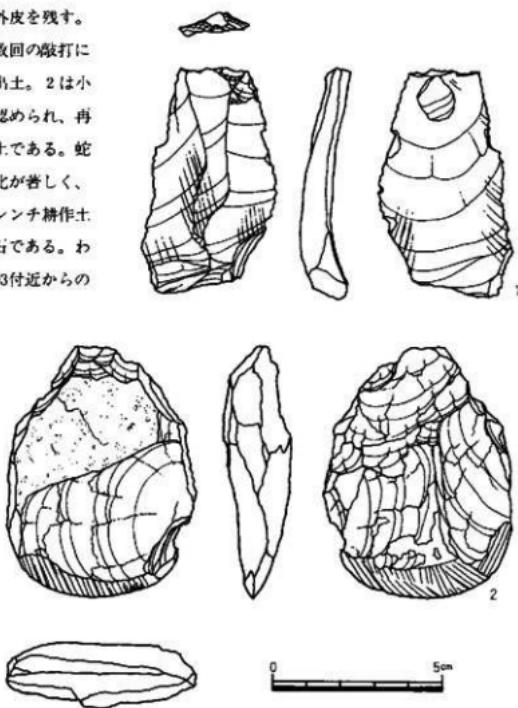
土器 (第13図4・5) いずれも条痕文が施され、晩期と考えられる。4は6トレンチ、5は9トレンチからの出土である。耕作土中からの出土で、既に原位置を失っていると判断された。5は、ほぼ全形を知ることができる深鉢である。平縁の口縁を持ち、無文とする。外面の口縁部から体部に至る所に、帯状に煤が付着する。また、体部内面には炭化物が全面に付着する。

石器 (第13図1・2図版17の226~228) 打製石斧

1は基部の一部と刃部を欠損し、表面には外皮を残す。大きな母岩から剝片素材を取り、結束部を数回の敲打により作り出す。花崗岩製。8トレンチから出土。2は小型の磨製石斧。欠損した刃部に、敲打痕が認められ、再利用の意図が窺える。S E 02埋上からの出土である。蛇紋岩製。226は完形の磨製石斧である。風化が著しく、かろうじて全形を知ることができる。8トレンチ耕作土中から出土。蛇紋岩製。227と228は叩き石である。わずかながらその辺に敲打痕を残す。SD 03付近からの出土。所属時期は不明であるが、ひとまずこの項に入れた。

(4) 須恵器 (第13図)

杯B蓋 (6~8) 6は、縁部小破片である。平らな頂部からゆるく曲がりながら縁部に至る。縁部断面はやや丸味を持つ。頂部外面はロクロケズリをし、他はロクロナデで仕上げる。四分の一の残存で、推定口径は19cm。X 14 Y 17区から出土。7は12の杯Aと共にX 9 Y 16区より出土したものである。調査区の壁面より検出し、それが耕作土中であることがよく看取できた。扁平なつまみを持ち、平らな頂部からスムー



第12図 石器実測 (2/3)

ズに端部に至る。端部は鋭くつまみ出され、頂部外面は、ロクロケズリの後、ロクロナデが行われる。内面は中心部までロクロナデする。8は、X14Y17からの出土である。頂部は丸味を持ち、ロクロケズリされる。

杯B (9~11) いずれも口縁部を欠く破片である。9はX6Y23からの出土で、高い高台が付く。底部外面はヘラキリ後ナデ、内面は中心までロクロナデする。10は大ぶりのものである。高台の径で13cmを測り、低く外へふんばる高台である。底部外面はロクロケズリし、2条の沈線を施す。内面は不定方向のナデ。11は高台の付く位置からすぐには口縁が立ち上がる。底部外面はヘラキリ後ナデで内面はロクロナデである。六箇用水南側での表採品である。

杯A (12) 杯B蓋の7と同じ所から出土した。焼成は悪く、風化も著しい。口径13.6cm、蓋高3.6cmを測る。底部外面をヘラキリ後ナデで仕上げ、内面は中心部までロクロナデする。

甕(13) 「く」の字に折れる口縁を持ち、端部はやや内側におさえ面取りする。口縁部の内外面はロクロナデし、体部外面にはカキメを施す。内面には円形当て具痕を残す。X13Y12からの出土である。推定口径27cm

須恵器の年代は、6と9が8世紀後半と考えられる。11はさらに年代が下がり9世紀代のものと考えたい。そして、それ以外のものは8世紀の前半として大過ないと考える。この期の遺物は他にフイゴの羽口がある(図版16)。

(5) 中世近世の遺物(図版16下)

瓷器系陶器 (208~210) いわゆる在地の京ヶ峰窯(酒井1986)の製品である。いずれも甕の破片。

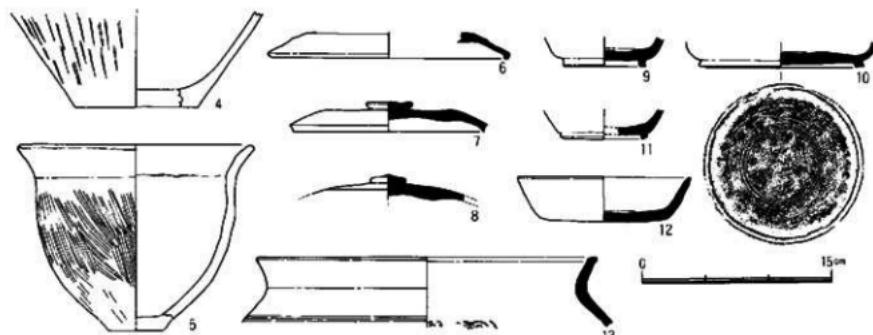
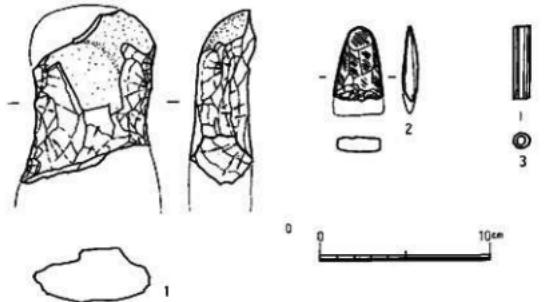
珠洲焼 (211~215) 212は壺鉢、他は甕の破片である。瓷器系陶器同様SD05及びその付近から出土している。

青磁 (217・218) 218は青灰色釉、217はやや黄色味のある釉を用いる。龍泉窯系青磁碗と考えられる。13世紀後半から14世紀頃と考える。

近世の遺物 220・223は唐津系、
219は瀬戸系、そして224・225は
越中瀬戸、222は巴文の泥メンコ、
221は寛永通宝である。18世紀以降。

なお、216は燈明皿で油煙が付着
する。中世に属する可能性がある。

鋤先 U字形鋤先である。X16Y
17区のSD05の立ち上がりから出土
した。詳細は、大沢氏の報文に譲る。

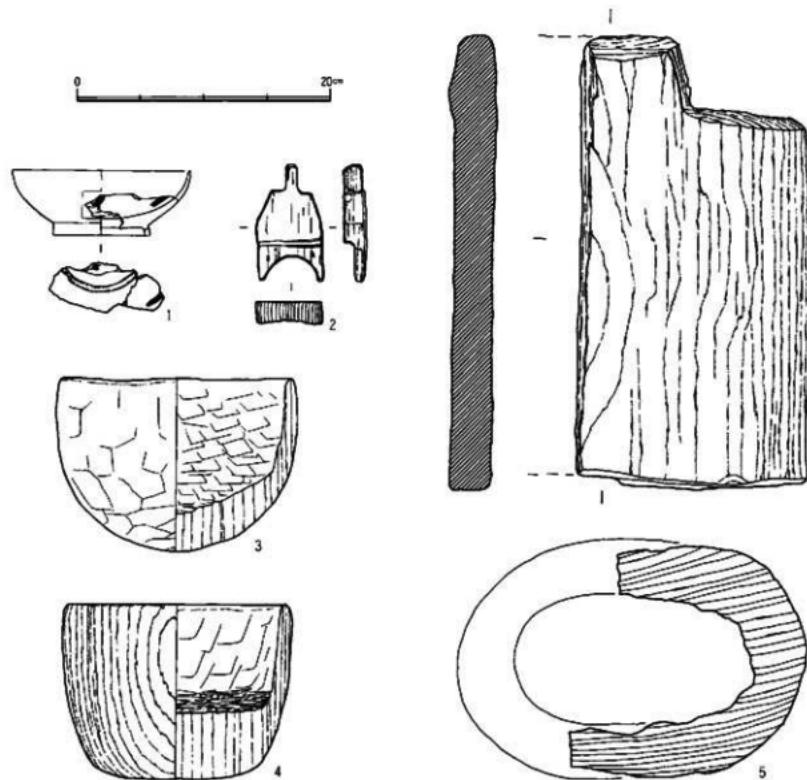


第13図 遺物実測 (1・2は1/3、3は1/1、他は1/4、4は一つ山古墳群6T出土)

(6) 木製品 (第14図)

3・4は井戸跡からの出土である。その他は、試掘の時に出土したものである。1は32トレンチから出土した椀で、高台の端部と口縁部を欠く。内外面に黒地に朱の文様が施される。口縁部を欠き法量を知り得ないが、おそらく14cm位と考えられる。久々忠義氏の分類によれば【久々1986b】、Ⅲ期すなわち18世紀以降では法量が13cm以下のものが主体を占めることから、中世以前に属するものと考えられる。2は用途不明品である。柾目取りした材を加工している。元興寺文化財研究所の伊藤健司氏の教示によれば、組み合わせ式の糸巻きの可能性があるとのことである。32トレンチ出土。3は鉢形木製品でSE02から出土した。心を外した広葉樹の材を用い、鋭利な金属器で刳りぬく。4は底部を平らに仕上げるものである。SE01から出土した。やはり心を外した針葉樹の材を用いている。底部は肥厚し、底部からの立ち上がり部分には荒い工具痕が鮮明に残る。底部の厚みなどを考え合わせれば、製作途中のものと考えられる。5は梢円形の筒状品で突起部を持つ。針葉樹と考えられる板目材を用い、一本で作ったものである。断面に肥厚する部分があることから桶状木製品の可能性もあるが、突起部の存在から、そこを上方と見做した。規格で19cmを測る。高さは突起部で35cmである。

(問 清)



第14図 木製品実測(1/4)

III 一ツ山古墳群

1 立地と周辺の遺跡

一ツ山古墳群は、北方へ舌状に張り出す丘陵台地の上にある。これまで2基の墳墓を確認しており、2号基の頂部で標高19m強、1号墓は14m弱を測り、それぞれに良好な古地条件を確保している。平野部からの比高差は14から10m程度であり、東側、すなわち三谷遺跡側が急峻な地形となる。西側の谷を隔てた丘陵台地には、かつて数基の墳墓が存在した二ツ山古墳群がある。さらにその西側には、北陸土師器第I様式の標式とされる中山南遺跡がある。昭和50年に県の史跡に指定されている。そして、下条川を臨む位置に弥生後期の墓群を検出した岡山遺跡がある。このように、一ツ山遺跡とその周辺は、弥生から古墳時代にかけての集落や墓群が多く、本県における古墳発生の手がかりを知るために重要な遺跡を内包している地域である。

2 調査の経過

発掘調査したのは1号墓のみである。3月27日と30日の2日間で外形測量を実施する。立木補償の問題が残っていたため、北側部分の測量には多くの時間を費やすことになった。外形測量図に基づき、墳丘の裾を確認するためのトレンチを4本設定した。調査の目的を墳形と年代の確認にとどめたため、主体部へのトレンチは設けなかった。5月31日発掘を開始、8及び9トレンチで縄文土器と、古式土師器破片が出土。6月1日、9トレンチで周溝を確認する。また墳丘の盛土を確認した。6月6日には11トレンチでも周溝を確認したが10トレンチでは、奈良時代の土塙と炭焼窯の窯尻を検出した。北側は現在畠地として利用されており、削平が著しく、周溝の検出は困難であったが12mの等高線上に段状部分を確認した。6月7日には9トレンチの溝を掘り、また墳形を知るために、16トレンチを設定した。この間、製鉄関連遺構の確認のために、12~15トレンチを設定発掘した。16トレンチでは、周溝が丸味を持ちながらも屈曲することを確認した。この段階で南北部分は方形を呈することが推察できた。

外形測量図と照らし合わせて、前方後方形の墳墓を想定したが、その確認のため予想されるくびれ部のトレンチ設定は、立木の障害のためできなかった。また、調査と平行して協議を進め、当墳墓は現状のままで保存することとなつたことから、これ以上の調査は不要と判断し、6月13日には全ての記録を終え、調査区の埋めもどしを実施した。埋めもどしを完了したのは、6月15日であった。

3 1号墓

丘陵台地の六箇用水の北側先端部に位置し、前面に広大な射水平野が展開する。頂部よりやや北側に東西方向に境界溝が掘られ、それより南側は竹林、北側は畠地となる。そして、畠地には、各所に庭木用苗木が植えられており、根巻きの跡などもみられた。すなわち、境界溝より南側は、より多くの開墾を受けていることになる。

1号墓には第16回に示したように、5箇所にトレンチを設定した。8・9・11・16トレンチで周溝を確認し、東西の径は20mに及ぶ。また南北方向では、8トレンチで現存する頂部から、ちょうど10mの所に周溝を確認した。10トレンチでは、前述のように、12mの等高線上に段を確認し、これが周溝の痕跡と考えられた。それは頂部から16mの位置にあり、南北での径は26mとなる。そして16トレンチで丸味を持ちながらも屈曲するコーナーを確認した。これらのことから、当墓の墳形は、長方形もしくは前方後方形と考えられる。前方後方形の可能性については前述のように、肝心な所が立木のため調査できなかったため確認できなかった。しかし、13トレンチに周溝の落ち込みが見られないことと、外形測量図から見て、前方後方形になる可能性はきわめて強いと考えられる。ここでは、とりあえず、長方形もしくは前方後方形としておく。

周溝を完掘したのは、9トレンチである。第15回に示したように、幅2.2mを測り、頂部側がだらかに立ち上がり

る。溝の埋土は、周溝掘削後間もなく褐色土が堆積し、その後に③層と⑦層が入る。③は黄褐色粘質土であり、北面では⑦層中に入る。頂部付近では、盛土の様子が覗える。⑤層が黒褐色土で旧表土となる。ここから縄文土器の破片や第18図の4・7などの土器が出土する。盛土は暗褐色土であり、頂部は未発掘のため不明である。周溝の最も低い所が10m 10cmであることから、現存する墳丘の高さは4mとなる。

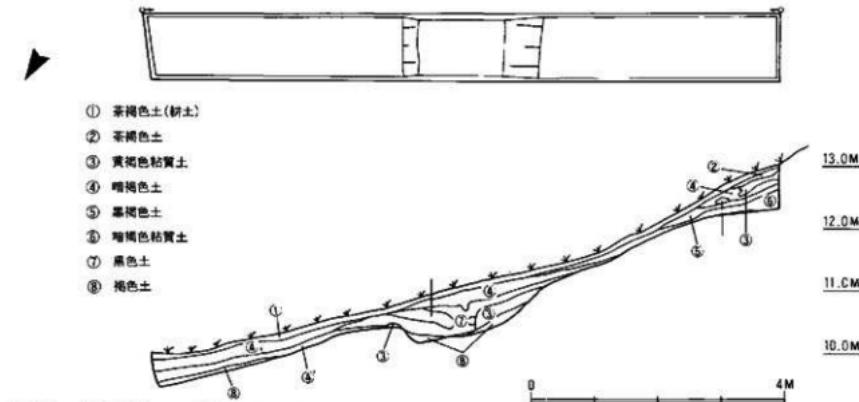
当墳墓の築造年代については、主体部を調査していないために、判然としないが、第18図の3～7に示す土器が出土している。3は、山内賛一氏の採集品で、溝の掘削時に出土したものである。小形壺と考えられ、外面をヘラミガキし丹塗りする。4と7は9トレンチ、5は8トレンチの出上でいずれも旧表土上面から出土している。6は三谷遺跡で分類した壺E2類で境界溝付近からの表探である。これらの遺物は、三谷遺跡のものに類似すると考えられる。したがって当墳墓の築造年代も三谷遺跡の存続したいすれかの時期に該当するものと考えられる。

4 2号墓

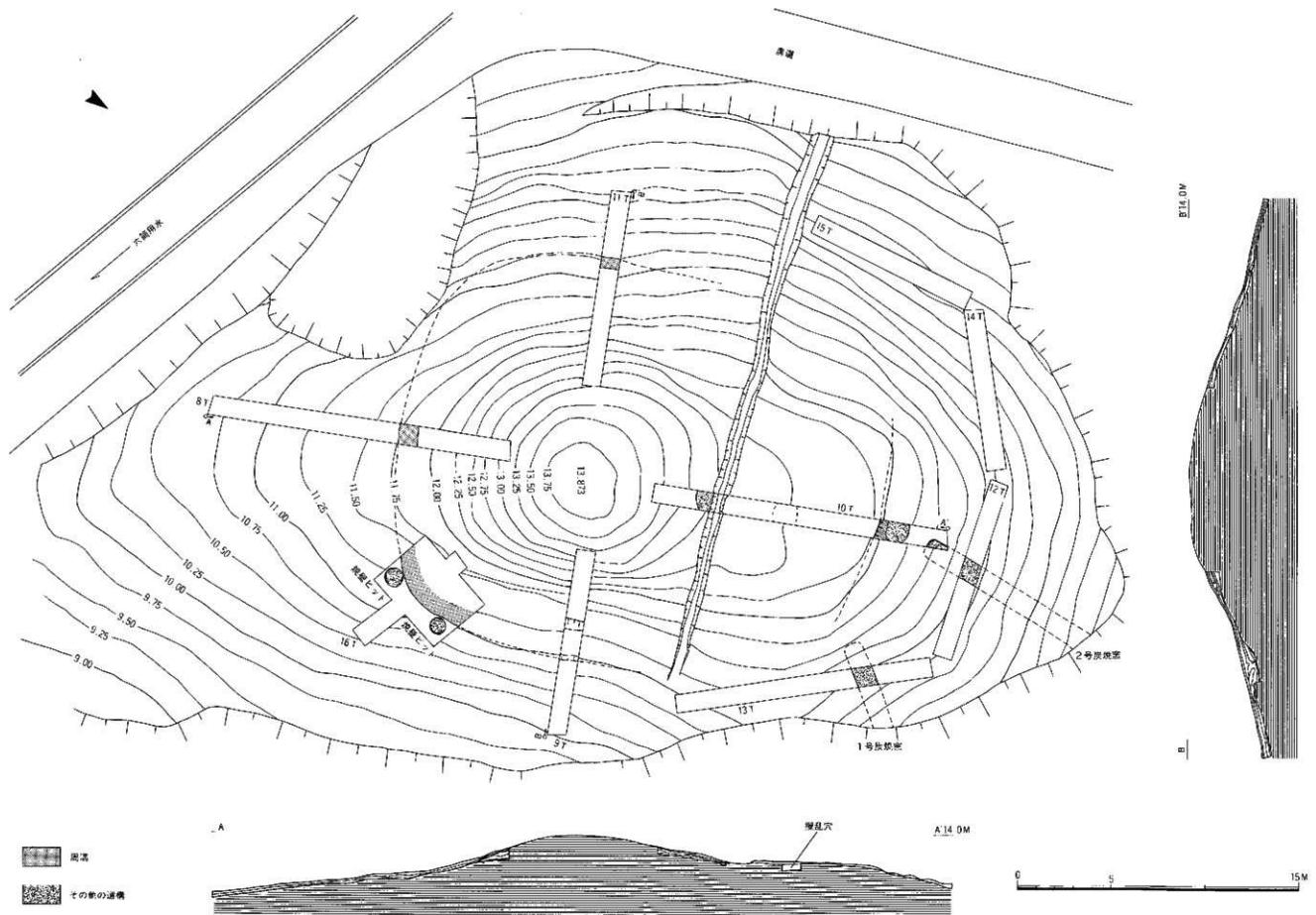
1号墓より14m南側にあり、当丘陵台地の最高位にある。占地としては当丘陵台地では最も良好な場所と言える。発掘調査はしていないが、1号墓の調査結果からみても墳墓であることには疑いなかろう。1986年6月1日に富山考古学会のメンバーである関と久々、岡本、鳥田の4名が土地所有者である久野久作氏の了解を得て外形測量を実施したものである。また測量にあたっては、久作氏の御子息で小杉高校地歴部OBである久弘氏の協力を頼った。ここに記して謝意を表するものである。

外形測量図は第17図に示した。平坦な台地上に、墳丘が突出しているのが外観でも良く判る。現状での地形変化点を追っていくと、ほぼ方形となり、下端で11m～12mの径を持つ。頂部は、6～7mの方形の平坦地となるが、ここにはかつて小塁を作ったことがあるとの事で、その際に頂部を削平された可能性がある。18m 25cmの等高線は南側に張り出す形となり、これも前方後方形の可能性が考えられる。しかし、発掘調査を行っていないために、墳形、規模とともに断定することはできない。

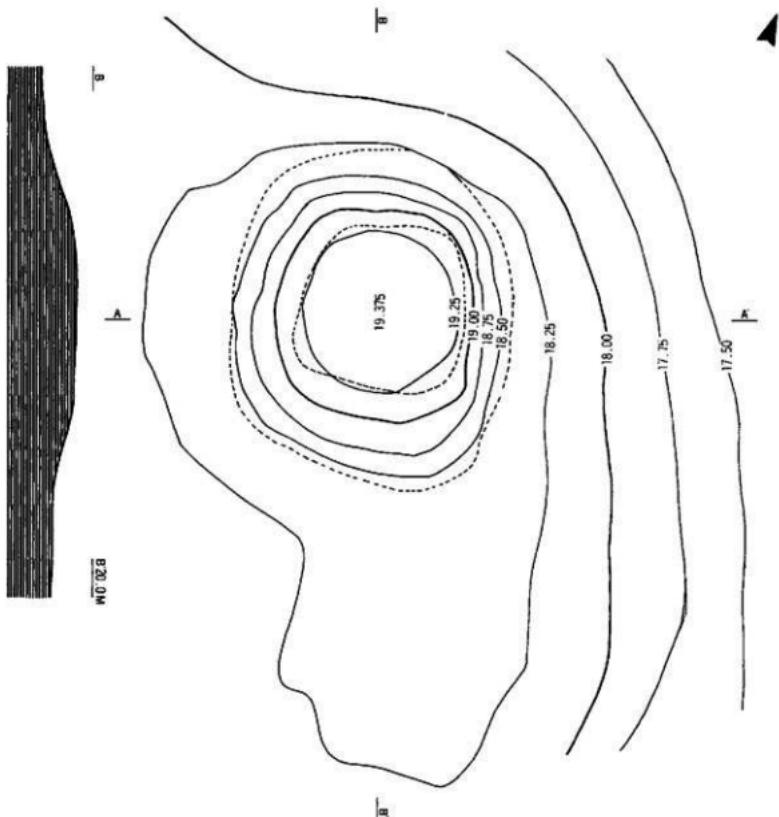
(廣清)



第15図 1号墓9トレンチ実測 (S=1/80)



第16図 1号基実測 (1/200)



破線は地形変化点

0 5 15 M

第17図 2号墓実測 (1/200)

5 遺 物

一つ山古墳群から出土した遺物は、調査地区から三つに分類される。一つは、製鉄遺跡のある地区、六箇用水南側斜面そして1号墳である。南側斜面からは、土師器片及び縄文土器片が出土しているが、いずれも図化できるものではない。また、当該地区が現状のまま保存されることになったことを付記しておく。

(1) S 地区の遺物 (第18図1~10)

当地区からは、縄文土器の細片の他に2トレンチから10の上陣器長甕が出土している。口縁を水平に外反させ端部を丸くおさめる。口縁部をヨコナナデし、体部は外面ともにハケメ調整する。1はピット13から出土した打製石斧である。多くの自然石と共に出土し、その状況は後世の投棄と考えられるものである。基部と刃部を欠き、表面に外皮を残す。花崗岩製。

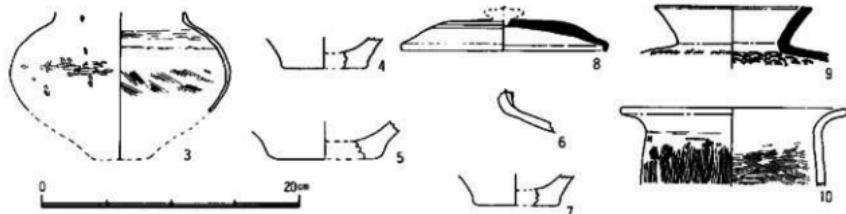
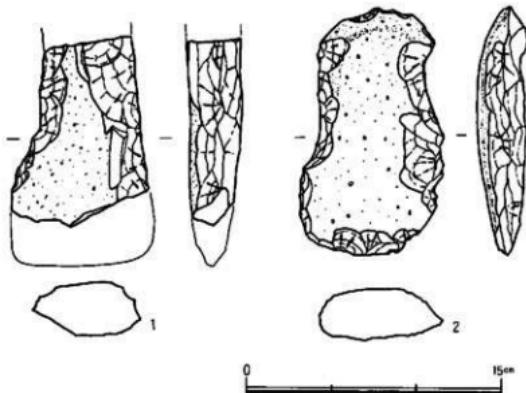
(2) 1号墓とその周辺の遺物 (第18図3~9)

3は、山内氏が境界溝で表探したものである。小形壺と考えられるもので、表面は丹塗りされる。内面にハケメが見られ、器壁は薄い。4・5・7は壺もしくは壺の底部片である。6は三谷遺跡で分類した壺E₂の頭部で凸帯に刻みが施される。境界溝からの出土である。8と9は須恵器で、10トレンチで検出された土壙から出土した。8は杯B蓋でつまみを欠く。頂部はロクロケズリし、縁部はロクロナデ、2条の沈線を環状に残す。端部は丸く内側に曲げる。頂部内面は、不定方向のナデとなる。径16.2cm。9は横状である。「く」の字に強く外反する口縁を持つ。また、2の打製石斧も境界溝の掘削時に出土

しているものと考えられ、木の根元に露出した状態で置かれてあった。完形品で外皮を残す。母岩から横長の剥片素材を取り、主にその両側面を荒い敲打で整える。裏面は全く調整されない。花崗岩製と考えられる。

なお、須恵器の年代については、資料が少ないために詳細は不明であるが、8世紀代として大過ないと考える。

(岡 清)



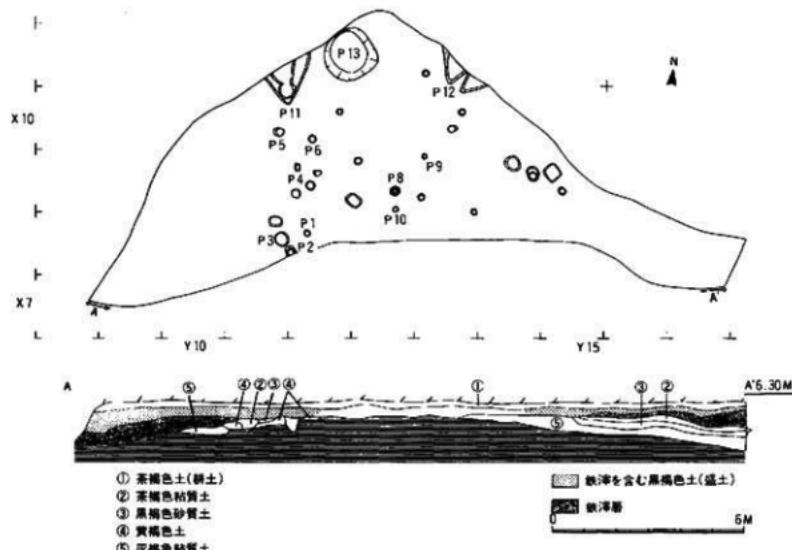
第18図 遺物実測 (1-2は2/3, 3-10は1/4)

6 S 地区

・ツ山古墳群の北端斜面に位置する。道路に係ることから調査したもので、その面積は、78m²である。この地区からは2箇所において製錬遺構の排滓場が確認された。すなわち、第19図の断面に見られるように、ゆるやかな尾根を挟んで2箇所に鉄滓堆積層がみられる。西側では5mの堆積層があり、それは、3層に分層される。その上に盛土整地による鉄滓混じりの黒褐色土がある。東側の堆積層も同様であり、ここでは2層の鉄滓堆積層を確認した。これは、製錬操業の回数を意味するものと考えられる。しかし、2箇所の排滓層間の切り合は、確認できなかった。調査区内における鉄滓と炉壁の量は、西側で鉄滓486kg、炉壁31.9kg。東側では、鉄滓が1,002.3kg、炉壁が90.9kgである。これらの中には、炉底滓と考えられるものが数個あり、大きいものでは26kgに及ぶ。炉本体は、斜面がカットされているだけに、その遺存の有無は不明である。なお、炭焼窯は、1号窯の位置する北東側斜面で確認している。カット面の観察では、窯体は、地表下1.7mの位置にあり地下式と考えられる。

鉄滓層を除去した段階で確認した遺構は、図示のとおりである。全て鉄滓層から外れた所からの検出である。ビットが25個あり、大きいものは3箇所で確認した。これらのビット群には規則性が見られず、建物配置を考えることは困難である。図中、番号を付したのは何らかの遺物が出土したものであるが、その多くは鉄滓である。ビット内の埋土は、盛土の黒褐色土であり、後世のものと考えられる。また、ビット13からは、第18図1の石斧が出土しているが、これも他の多くの石と同様に投棄された状況である。大型のビットは、立ち上がりがほぼ垂直であり、鋭利な工具による掘削を窺わせる。上飾器や須恵器の細片も出土しているが、いずれも既に原位置を失ったものである。製鐵遺構に伴うものとも考えられる。

(関 清)



第19図 S地区遺構全体 (1/160)

IV まとめ

三谷遺跡と一つ山古墳群は、県立四年制大学グランド造成に伴い調査したものである。一つ山古墳群は、現状のままで保存されることになり、三谷遺跡の多くもやがて完成するグランドの下に遺存することになる。しかし、わずかな面積の調査ではあったが、弥生後期から古墳時代初頭にかけての土器を多量に得ることができた。該期の資料は、富山県西部では決して多くはない。ここに簡単にまとめを記す。

1 三谷遺跡の土器とその編年的位置

北陸における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器、いわゆる古式土器の研究は、石川県において浜岡賢太郎・吉岡康輔両氏により先鞭がつけられた。すなわち、両氏は、月影遺跡と二ツ屋遺跡を素材とし、月影から二ツ屋という編年の序列を指摘し、さらに「月影式」の型式設定を行った〔浜岡・吉岡1962〕。その後古岡氏は、富山県中山南遺跡の資料や片山津玉造遺跡出土資料を加え、総括的な研究を発表し〔吉岡1967〕、その基礎を確立した。一方、橋本澄夫氏は、高畠遺跡の検討の中で、畿内布留式併行期土器の組成内容を明らかにするとともに、櫛橋II式土器と次場上層式土器に地域差を見い出し、後者を能登・越中の後期後半の標式的土器として評価した〔橋本1975〕。これに対する吉岡氏と小鳴芳孝氏は、塚崎遺跡の調査成果に基づき、弥生末期から古墳時代初頭に亘る土器を再検討した。塚崎遺跡出土土器を3型式に区分し、当遺跡の主体的な土器群である塚崎II式を能登の柳田式土器と月影式土器の中間に位置づけるとともに、月影式土器の定義づけにまで言及している〔吉岡・小鳴1976〕。その後、谷内尾晋司・田嶋朋人氏らにより、その研究は進展され〔谷内尾1984・1986・山嶋1986a・1986b〕、その総括として1986年9月に「シンポジウム「月影式」土器について」が開催されている。

一方、富山県の現状を見ると、まず上野章氏による基礎的研究がある〔上野1972〕。その後、魚鶴遺跡、串田新遺跡、江上A遺跡、小杉流団No.21遺跡、辻遺跡などの集落跡や、杉谷A遺跡や南太閤山I遺跡などの墓跡資料の増加に伴い、石川との対比が急速に進展しつつある。このようななかで、中山修宏氏は串田新遺跡の資料を素材とし、詳細な土器の検討から、住居跡ごとの編年率を示した〔中山1981〕。また、橋本正春氏も吉岡編年に基づき、県内の該期の土器の位置づけを行っている〔橋本1982〕。この間、上市町江上A遺跡において、弥生時代の集落跡が調査され、良好な資料が得られた。この江上A遺跡の膨大な資料は、久々忠義氏により後期を5期に区分され〔久々1984〕、その後、石川との比較の中で若干の修正を加えている〔久々1986〕。すなわち、北加賀の土器との対比で、II期を法仏I式、III期を法仏II式から月影I式、そしてIV期とV期を月影II式の各時期に当てている。

翻って、三谷遺跡の土器を見ると、主体となるのは、江上A遺跡後期III期の範囲を出るものではないと考えられる。しかし、前述のように後期の土器編年も細分化し、また、その地域性などに言及されている実態を踏まえるならば、当然のことながら当遺跡の土器の整理も要求されることになる。以下にその位置を明らかにしたい。

壺形土器では、圓化し得た土器に占める比率は45.2%と最も多い。また、有段口縁は83%を占める。この中でA類はわずか4点で、Bの中では8.5%にすぎない。これに対してB類が最も多く55%を占める。このことは少なくとも擬凹線を主体とする月影式土器とは、空間的にも区別されるものである。一方、有段口縁では口縁帶が広い幅を持つものが少なく、また底部形状では、平底を呈するものが多い。このことは、月影II式に見られる口縁帶の幅広化と底部の小形化という現象に照らし合わせれば、その前段階に位置づけて大過ないと考えられる。

壺形土器は、全体の30.9%を占める。A類の150が特異な形状であり、新潟県長岡市横山遺跡〔坂井他1983〕に類似のものがある。B類は串田新遺跡2号住居跡で出土している。G類とK類は、流団No.21遺跡で出土しており、それは法

仮Ⅰ式と猫橋遺跡の時期に当たっている〔上野1985〕。J類は江上A遺跡で出土例があり、Ⅲ期とされる。

高杯形土器は、全体では12.3%を占める。A類は屈曲部からの伸びが比較的小さく、古相を呈する。D類は車田新遺跡3号住居跡にも例があり、塚崎IIから皿式の間に位置づけられている〔中川1981〕。

器台形土器は、7.1%と多くはない。概ね江上A遺跡のⅢ期土器群に類似を見ることができる。A類の短い脚台のつくものは、立山町辻遺跡〔池野1987〕に類似品がある。

以上を要約すると、三谷遺跡の土器の主体は、江上A遺跡のⅢ期にあり、一部、車田新の時期を含むことになる。すなわち、法仮Ⅱ式から月影Ⅱ式までの幅を考えざるを得ない。また、他地域との併行関係を知る資料としては、壺・壺C類の近江系上器があり、それは中西常雄氏により、機内第V様式の範囲内に位置づけられる〔中西1985〕。

なお、第10回の141は、繩文晩期末のものと考えられ、142は、櫛描文を有する壺である。また、壺の口縁部帯は、無文のものが主体を占める。このことは、北陸東部の特徴を持つ土器群として、從来からの指摘を補強するものと言えよう。

2 一ツ山古墳群について

富山県における弥生後期から古墳時代初頭にかけての墓跡は、小杉町岡山遺跡〔橋本1970〕、上市町飯坂遺跡〔岸本1981〕、小杉町南太閤山I遺跡〔関・久々1984〕、富山市杉谷A遺跡〔藤田1975〕、小矢部市平桜川東遺跡II〔上野他1979〕、同市横掛遺跡などが調査例としてある。立地で共通するのは、南太閤山I遺跡や杉谷遺跡であり、墳墓とともに多くの方形周溝墓や土壙墓が確認されている。これらの例から、おそらく一ツ山古墳群も同様に方形周溝墓などで構成される可能性がある。また、杉谷A遺跡の墳墓形態は、該期に一般的であるように多種多様である。

一ツ山古墳群1号墓は、確実に盛り土をもっており、その形は前方後方形とも考えられる。既存の資料に照らせば、決して整合性を欠くものではないと考える。また、その造作年代は、出土物などから三谷遺跡の存続時期内に含まれる蓋然性がきわめて強いと言えよう。そして小杉町五歩一古墳〔岸本1977〕、婦中町王塚古墳や軒使塚古墳にみられるように、大型古墳の祖形もしくは先駆的な墳墓として重要な資料を提示するものである。 (関 清)

引 用 参 考 文 献

- イ 池野正男 1987 「先史・古墳時代の遺物」『北陸路・瀬戸内地方調査概要』立山町教育委員会
ウ 上野 豊 1972 「弥生時代鉢、古式土器群」『富山史叢古編』富山県
上野 豊 1973 「弥生式後期末及び土器式」『富山県潟川流域の遺跡調査報告書』富山市教育委員会
上野 豊・伊藤隆 1979 「小矢部市平桜川東遺跡周溝墓調査報告書」小矢部市教育委員会
キ 岸本慎故 1977 「小杉町五歩一見跡の前方後方墳」『進歩』70 富山考古学会
岸本慎故 1982 「『坂坂遺跡』『北陸自動車道周溝墓調査報告書』上市町遺跡編」上市町教育委員会
ク 久々忠義 1981 「江上A遺跡」『北陸自動車道周溝墓調査報告書』上市町遺跡編一 上市町教育委員会
久々忠義 1984 「弥生時代の陶器」『北陸自動車道周溝墓調査報告書』上市町木製品・経緯編一 上市町教育委員会
久々忠義 1986a 「富山県における器式土器について」『シンボジウム「月影式」土器について一報告編一』石川考古学研究会
久々忠義 1986b 「富山県内出土の土器について」『大境』第10号 富山考古学会
サ 酒井洋次 1986 「富山県京ヶ峰古墳」『日本考古学年報』37 日本考古学会協会
坂井秀治 1986 「最後における月影式並行期とその後の二層」『シンボジウム「月影式」土器について一報告編一』石川考古学研究会
セ 関 清・久々忠義 1984 「富山市引佐町周溝七石・太閤山・富山市内遠野地区調査報告書(2)」富山県教育委員会
タ 田嶋明人 1986a 「W 考察—遠野町出土土器の編年考察」『瀬戸町遺跡II』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1986b 「弓張出現在の土器群とその前後」『瀬戸町遺跡II』石川県立埋蔵文化財センター
ト 来海性文化財研究会 1986 「矢山式土器とその前後」『愛知考古学講話会』
富山県埋蔵文化財センター 1988 「富山県埋蔵文化財センター一年報 昭和02年度」
ナ 中西常雄 1983 「近江における變形土器の動向—丹波内期を中心として」『考古学研究』125 考古学研究会
中山裕志 1983 「車田新遺跡II—北東地区的輪削標記式」大門町教育委員会
△ 橋本正久 1970 「金沢市高島遺跡」金武市教育委員会
橋本 正 1970 「岡山遺跡」富山市教育委員会
橋本正春 1985 「富山市の土器研究動向」『富山市考古資料類紀要』第1号 富山市教育委員会
沢岡重夫・吉岡廉也 1962 「加賀、能登の古式土器群」『古式土器研究』第32号 古代学研究会
フ 藤田富士太 1975 「杉谷A遺跡」『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古岡英明 1972 「古跡時代」『富山史古跡考』富山県
ヤ 谷内尾吉司 1984 「北陸において古墳前期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
谷内尾吉司 1986 「月影式土器をめぐる研究動向」『シンボジウム「月影式」土器について一報告編一』石川考古学研究会
山本正政 1985 「土器時代」『石器』『富山八尾山古墳遺跡』京ヶ峰古墳調査報告書(2) 八尾町教育委員会
三 古岡康輔 1967 「北陸における土器の解説」『考古学ジャーナル』No.6
古岡康輔・小幡芳季 1970 「塙崎遺跡」『北陸自動車道周溝系埋蔵文化財調査報告書II』石川県立埋蔵文化財センター

三谷遺跡出土鋤先の調査

大澤 正己

片耳側を欠損するU字形鋤先の本質挿入部の2箇所から顕微鏡試料を採取し、金属組織の調査を行なった。

該品は、Photo.1の顕微鏡組織からみて、炭素(C)含有量4.3%以上の白鉄(White cast iron)である。冷却速度は早く、鉄込みっぱなしで、特別の軟化処理は施されていない。鋤物特有の硬くて脆い材質である。

製鉄原料は、非金属介在物(鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物)が未検出であるので、砂鉄か鉛石かの同定はできなかった。なお、該品の堆定年代は中世が比定されている。

試料Aの②、③は研磨後白色光沢を保っているが自然腐食(Etching)を受けていて白鉄の組織である。

白い部分はセメントタイト(Cementite)、黒い部分はオーステナイト(Austenite)より変化したパーライト(Pearlite)、峰の稜状の部分はセメントタイトとオーステナイトの共晶のレデブライト(Ledeboulite)である。

¹¹ 鋼鉄には白鉄とねずみ鉄がある。白鉄は炭素がセメントタイト(Fe_3C)として存在し、ねずみ鉄は黒鉛として認められる。その差を生ずる主なる因子は冷却速度と成分である。冷却速度が速いときはセメントタイト、遅いときは黒鉛が析出する。成分は炭素(C)と珪素(Si)で影響が大きい。

試料Bの④、⑤は完全酸化を受けた個所である。しかし、これも自然腐食で白鉄組織である。

注) 富山県のねずみ鉄は、能打池遺跡出土鉄製器で確認している(大澤正己 1987、「越中富山の古代製鉄」)富山県埋蔵文化財センター所報第17号、富山県埋蔵文化財センター)。

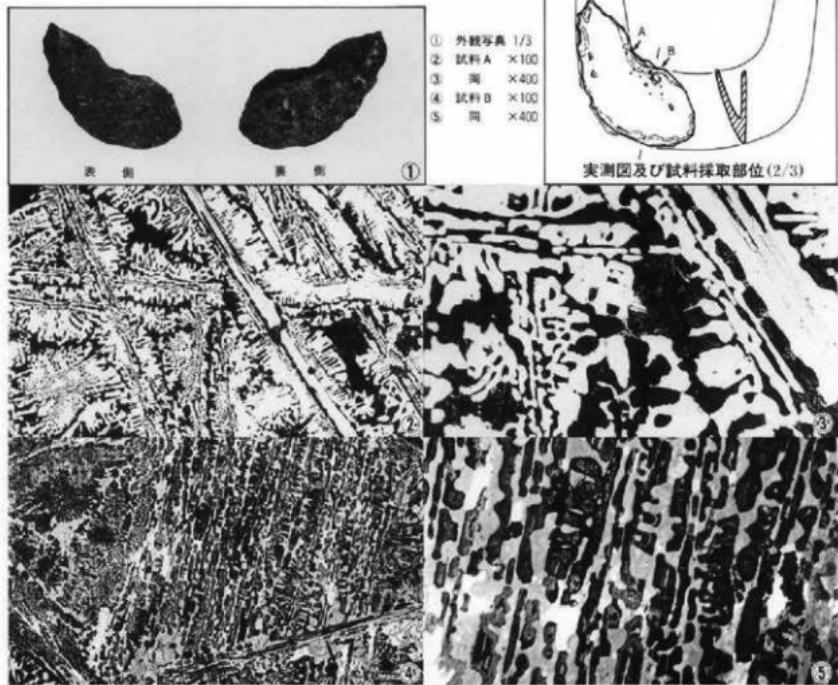


Photo. 1 三谷遺跡出土U字形鋤先の顕微鏡組織

図

版



1. 試掘風景



2. 道路全景
南から



3. 調査区全景



1. 調査風景



2. 遺物出土状況



3. SD05
SK03

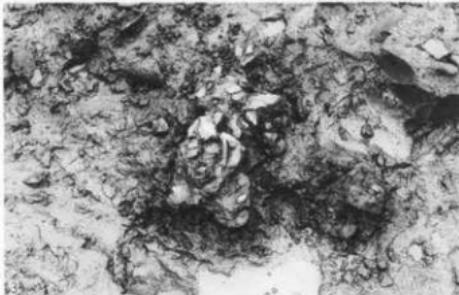
1. 遺物検出



2. 遺物出土
状況



3. 原石出土
状況



4. SD01



5. SK02



6. SK03



7. SD04



8. 同上



9. SD05

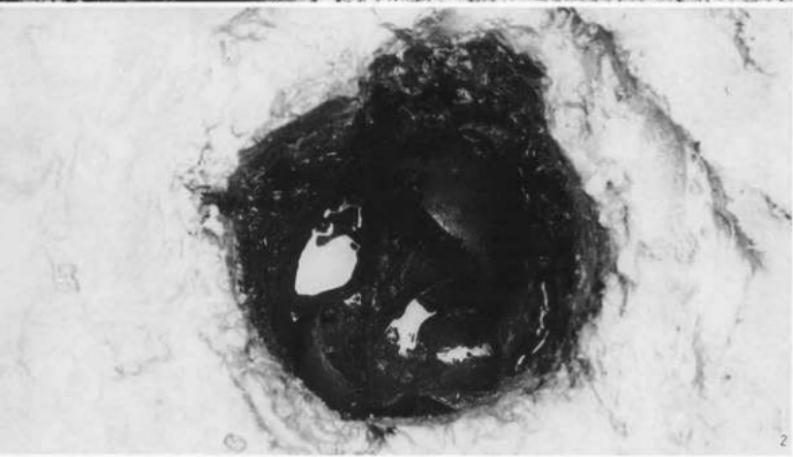


10. SD08





1. SE 检出状況



2. SE01遺物
検出状況



3. SE 完成状況
4. SE01



5. SE02
6. 同上

1. 1号墓
東から



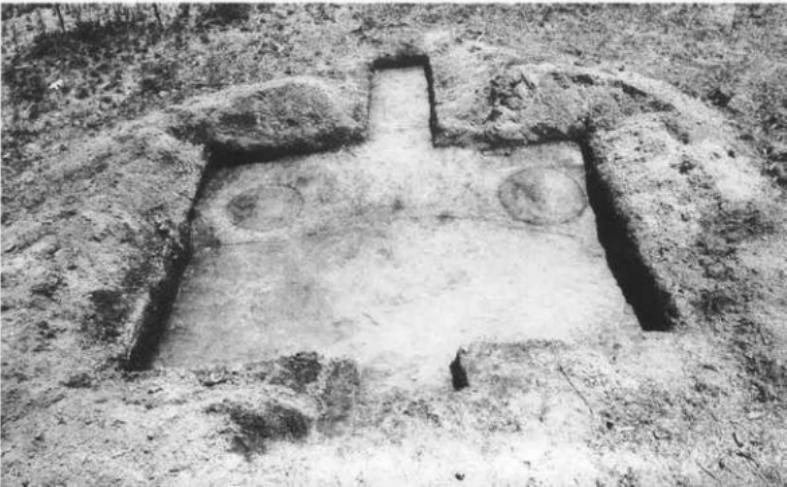
2. 同 上
南から

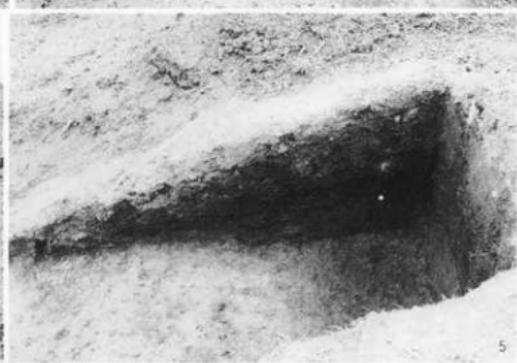


3. 同 上
北から

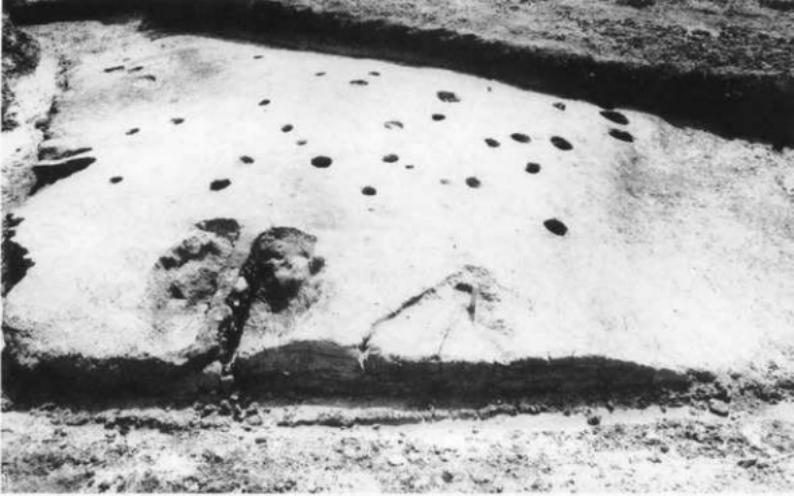


4. 同 上
16トレンチ





1. S地区全体



2. 同 上
東から



3. 同 上
西から



圖版 8

三谷遺跡
出土土器



150



31



84



26



1 : 3

124

図版9

三谷遺跡
一つ山古墳
出土土器



1



2



34



24



138



21



17-4



17-5



17-10



140



13-5



174

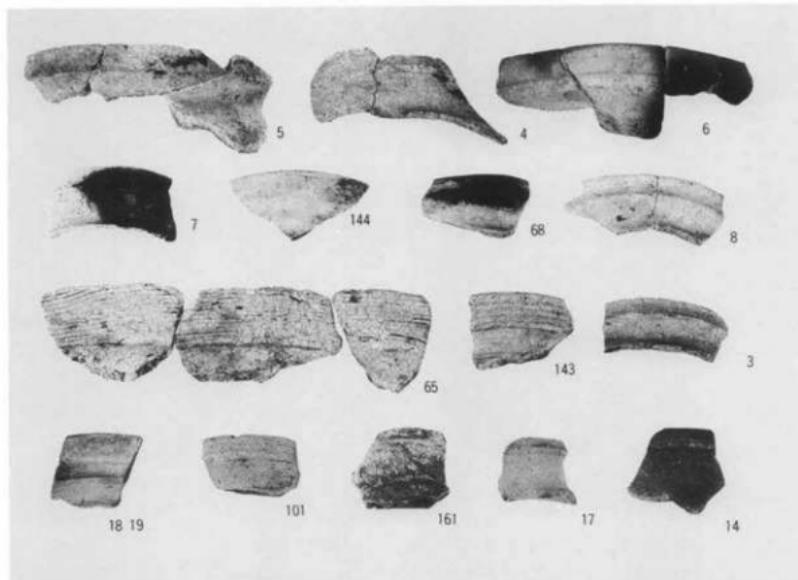


148

1 : 3

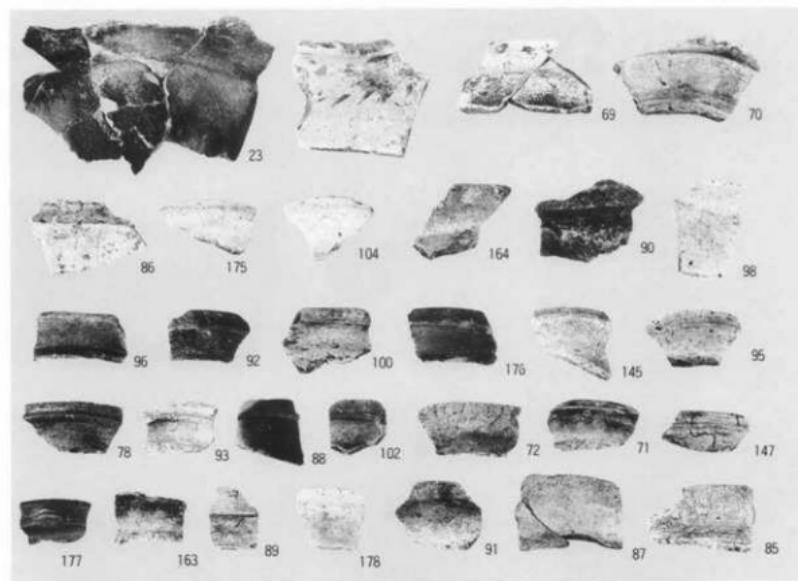
13-4

図版10



1 : 3

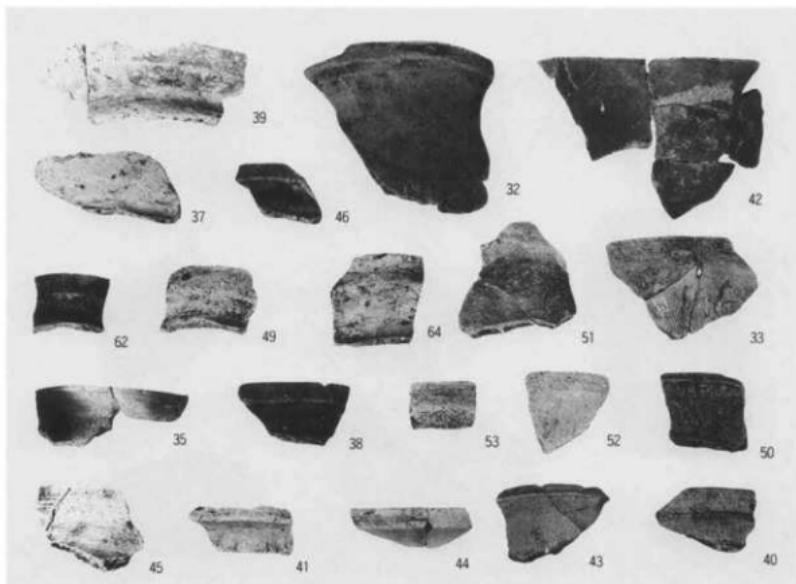
三谷遺跡
出土土器



1 : 3

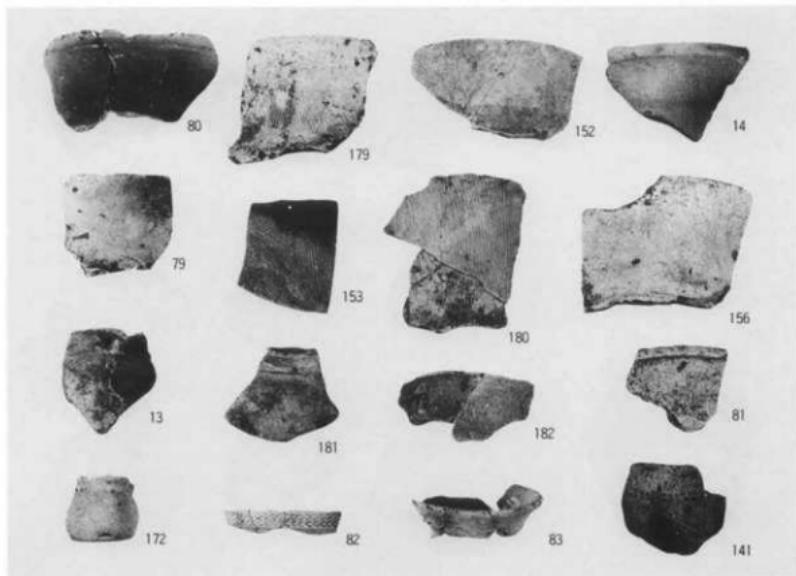
三谷遺跡
出土土器

図版11



1 : 3

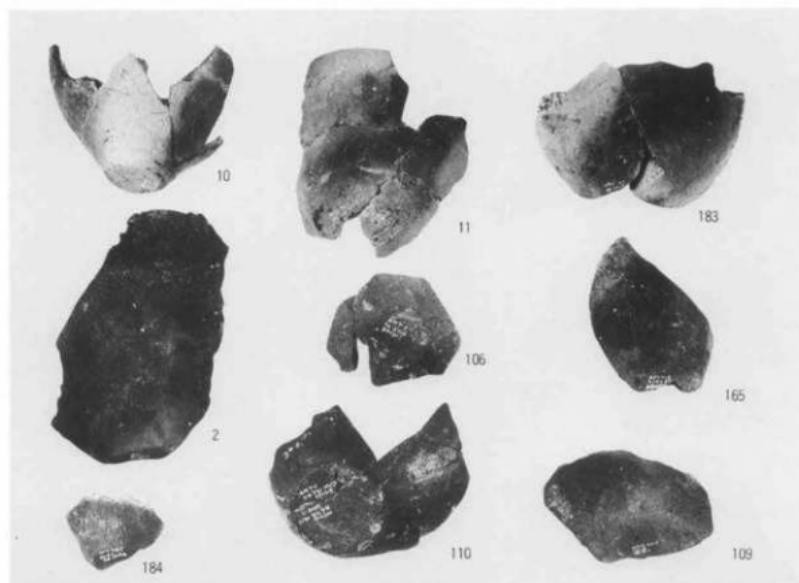
三谷遺跡
出土土器



1 : 3

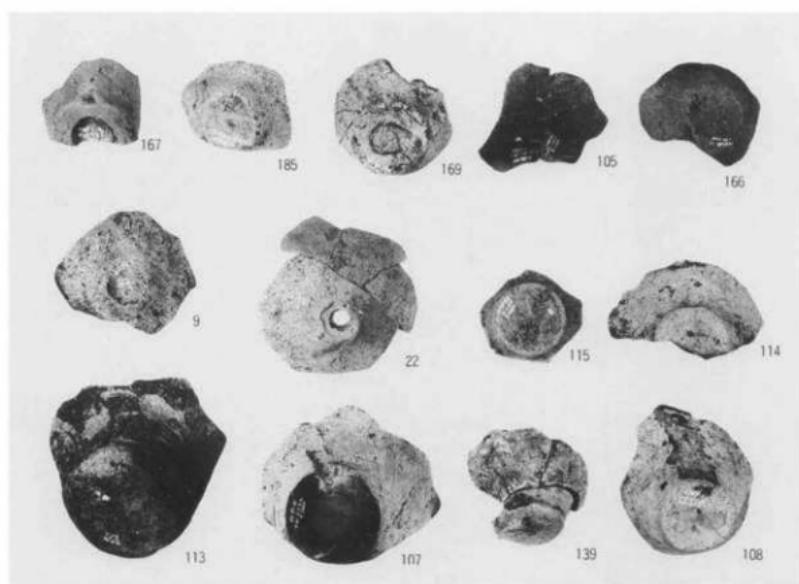
三谷遺跡
出土土器

圖版12



1 : 3

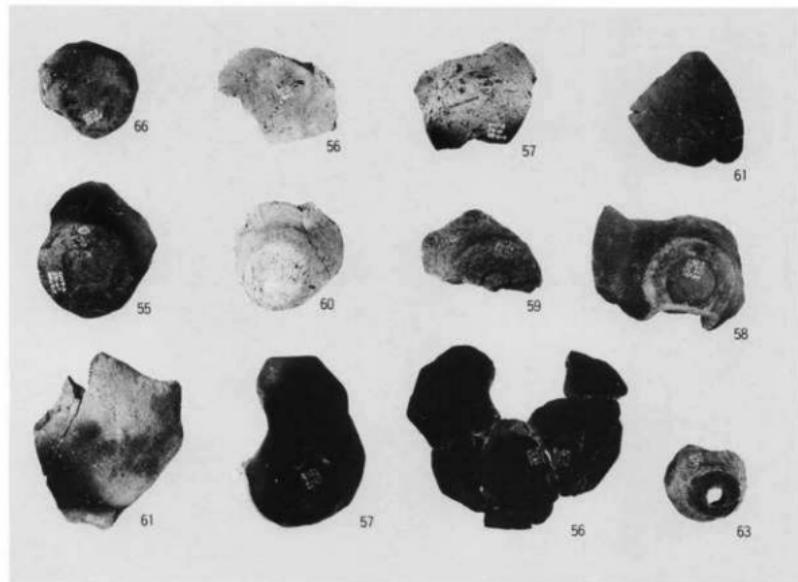
三谷遺跡
出土土器



1 : 3

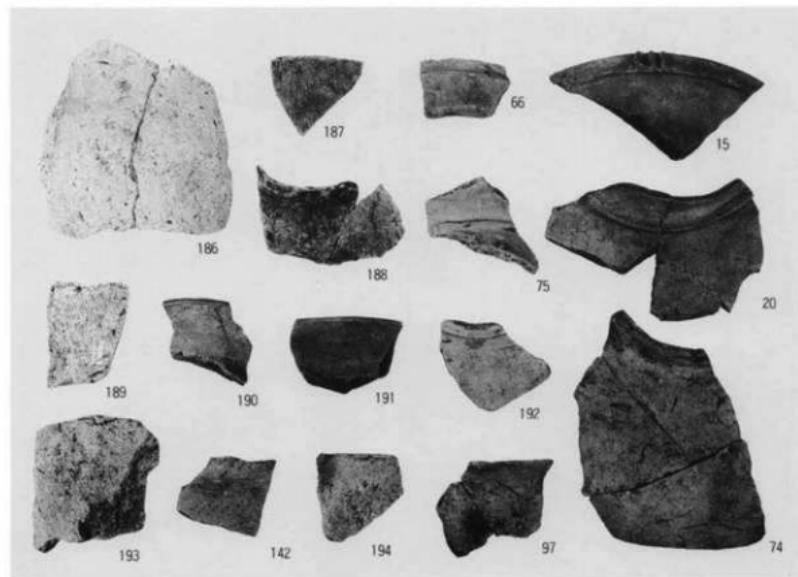
三谷遺跡
出土土器

図版13



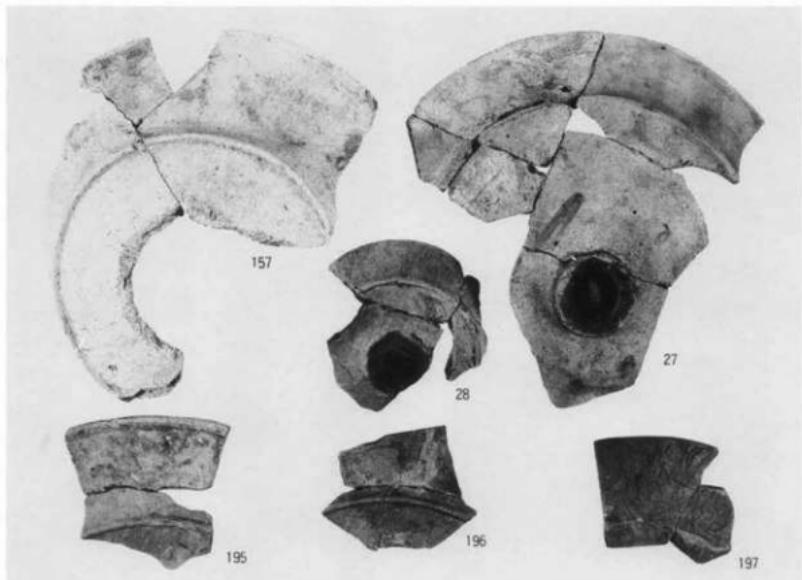
三谷遺跡
出土土器

1 : 3



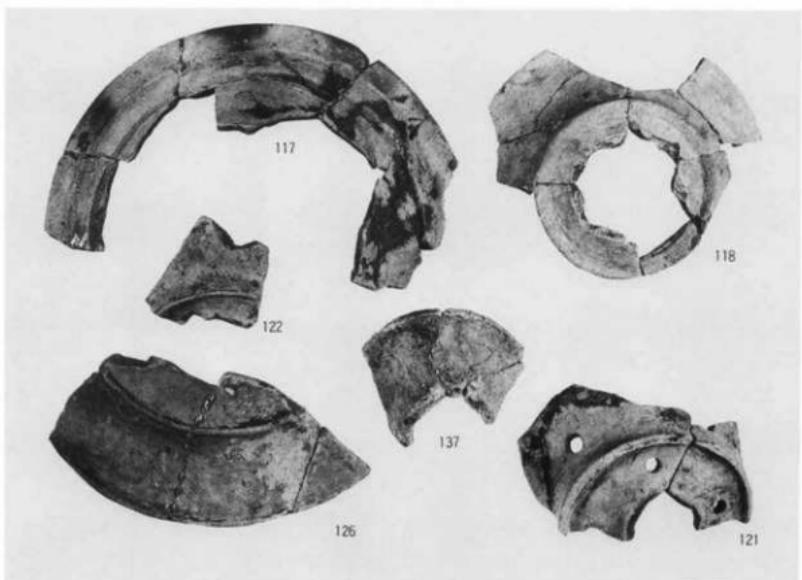
三谷遺跡
出土土器

1 : 3



1 : 3

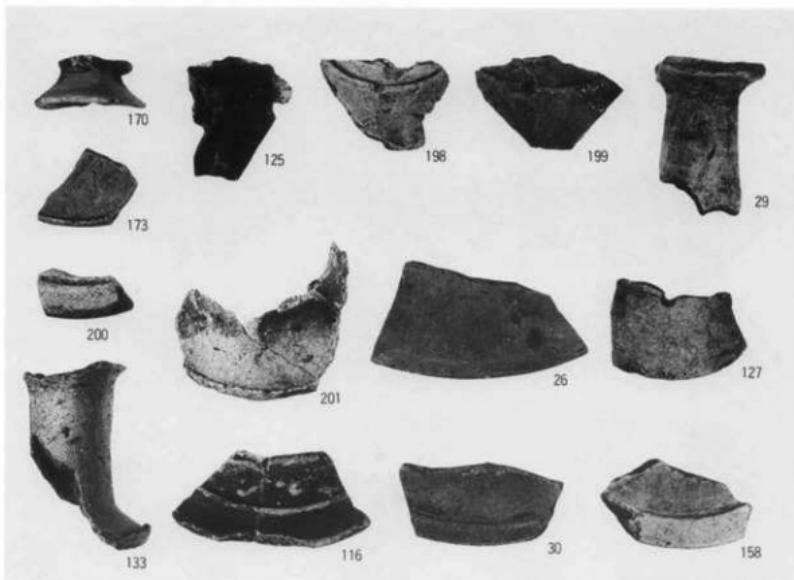
三谷道跡
出土土器



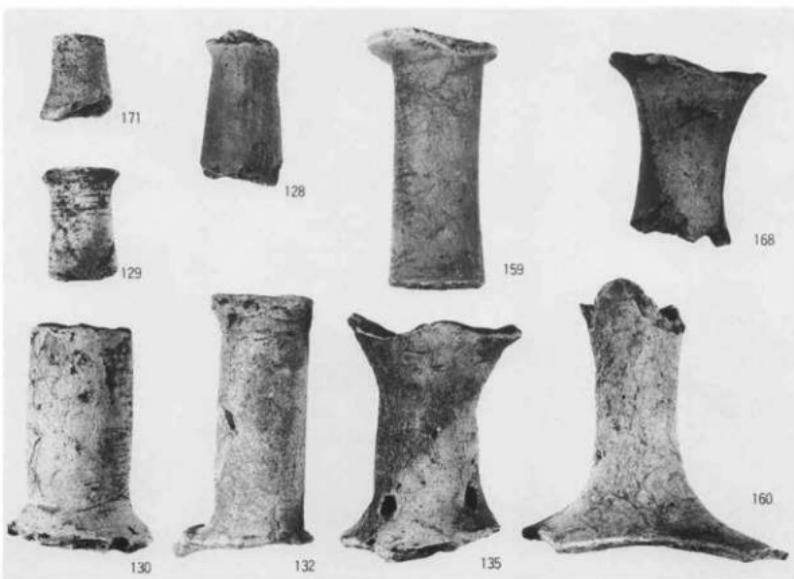
1 : 3

三谷道跡
出土土器

図版15

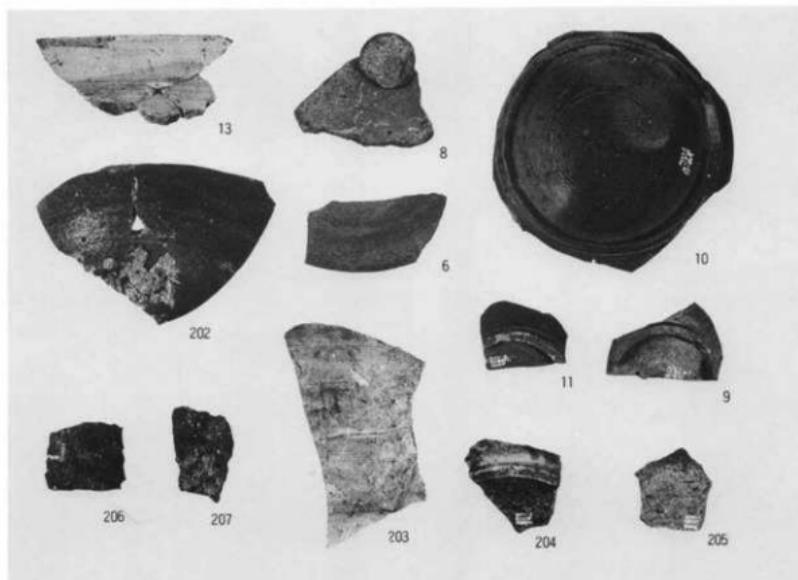


1 : 3



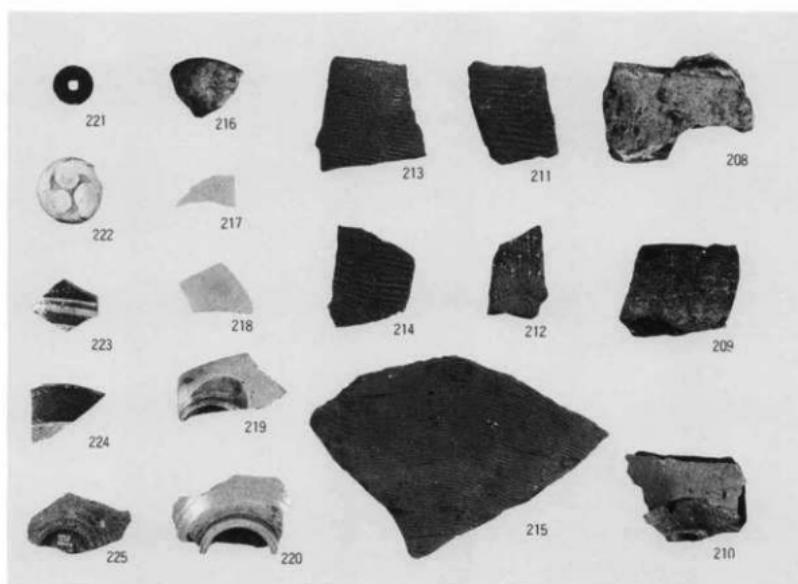
1 : 3

図版16



三谷遺跡
須恵器
ワイゴ羽口

1 : 3



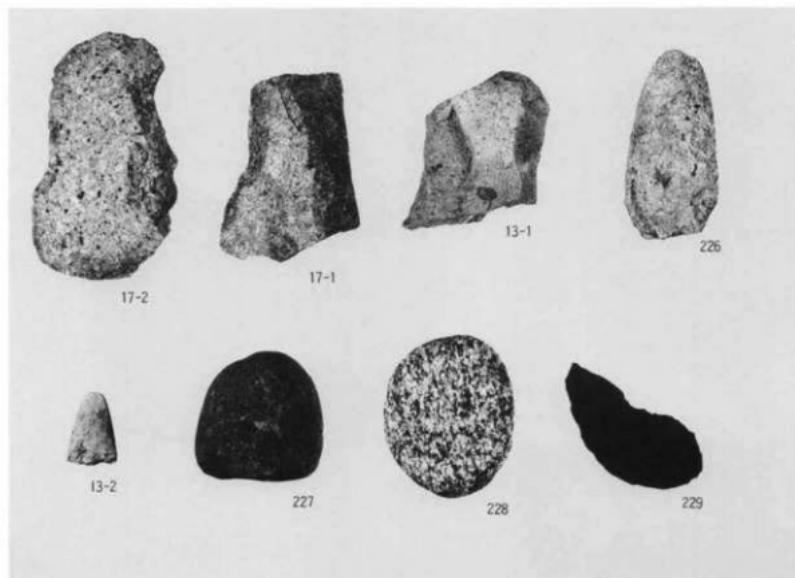
三谷遺跡
中・近世

1 : 3

圖版17



1 : 3



三谷遺跡
石器
歴先
一つ山古墳群
石器

1 : 3



6-1

13-7

13-12



13-3



12-1



12-2



12-4



12-4



12-5

6-1・13-3は1/2 その他は1/3

12-3



三谷遺跡・一つ山古墳群

平成元年3月31日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター
発行 富山市茶屋町206番3号

印刷 日興印刷株式会社
